

# 東北地方における弥生土器の形成過程

## The Formation Process of Yayoi Pottery in Tohoku District

高瀬克範

はじめに

①編年の問題点

②大洞A'式の上限

③大洞A'式直後の土器群

④広域編年への位置づけ

おわりに

### 【論文要旨】

東北地方における縄文時代終末期の土器編年は、とくに大洞A'式土器の理解をめぐって混乱が続いている。大洞諸型式の認識は、東日本の縄文時代晩期・初期弥生時代土器研究に大きな影響力をもつことから、この問題の整理が肝要である。ここでは、東北最後の縄文土器とされる大洞A'式の範囲を規定し、その後の土器群の変遷を小地域ごとにとづけることで、この問題の再検討を試みた。

山内清男による大洞A'式設定経緯と現在の資料とのつきあわせから、大洞A<sub>2</sub>式の設定をみとめつつ、変形匹字文の沈線化をもって大洞A'式の上限を規定した。この際、当該期の文様を3つの系列に整理し、これまで考えられてきたような典型的な変形匹字文からだけではない変形工字文の多角的な発生を論じた。大洞A'式までの段階には、東北地方のなかに器形の面での地域性がみられるものの、文様に関しては規格性のたかい部分を保持していた。よってこの段階を、東北の一体性がたもたれていた最後の段階と考えた。

つぎにその直後と考えられる土器群への変化を、東北北・中・南部の各地域ごとに検討した。その結果、東北北部における初期弥生土器とされる砂沢式には、大洞A'式とは型式として区分されるに十分な基準がみとめられ、青木畑式・御代田式といった東北中・南部の土器群と並行関係にあることを推察した。この成果を関東・中部・東海・近畿地方の広域編年に照らしあわせ、大洞A'期が畿内第I様式中段階に、砂沢期が畿内第I様式新段階に並行する編年観をみちびくに至った。

## はじめに

東日本縄文文化終末期の土器編年研究は、いくつかの点で重要な課題を抱えている。編年の核となるべき大洞諸型式に対する見解の相違もそのひとつであり、このため各地域における縄文土器の終末時期が不安定となっている。当然ながら初期弥生土器に関する研究もこの影響を少なからず被っており、東日本における稲作農耕社会が成立する社会的背景を探ろうとする際の障壁となってきた。

いうまでもなく、この問題を解決する手段は、東北地方における縄文晩期終末～弥生時代にかけての土器群の変遷に関する理解の基盤を整備すること以外にはありえない。これは大洞A'式の範囲を明確にし、その直後の土器群の並行関係を確定することを意味している。とくに東北北部の初期弥生土器とされる砂沢式については大洞A'式との区分に混乱が生じており、同時に東北内部での並行関係の把握も難しい状況にある。砂沢式が多数の「遠賀川系土器」を組成することは周知されており、列島内における西日本的要素の拡散過程を論じるにあたっては砂沢式の理解はさけて通れない問題といえる。東北の「遠賀川系土器」の年代が畿内との対比において論じられている以上、すくなくとも近畿地方までの広域編年上に砂沢式を位置づけなければならないのである。ただし、西日本から東北への影響は一時的であったと考えられているように〔設楽 1991b:44, 林 1993:73〕, 「遠賀川系土器」の変化の速度は在地系土器に比して変則的あるいは極端に遅いと考えられ、考察の基盤はあくまでも各地域の在地系土器におかれることはいうまでもない。

ここではまず東北地方における縄文晩期終末および直後の編年上の問題点を整理し、それらを克服するための考え方を提示する。そして大洞A'式の上・下限を規定したうえで、広域編年上における砂沢式の位置づけについて考えなおしてみたい。

## ①……………編年の問題点

### 1 ふたつの課題

砂沢式の編年の位置づけを考察するためには、縄文時代終末期、すなわち大洞A'期からの変遷の検討が不可欠である。これまでこの時期の土器群の変遷は、変形工字文をおもな手がかりとして理解されてきた。大洞諸型式にみられる地域性を捨象して並行関係を論じるためには、複雑な体系をもち、なおかつ共時性を示す指標として有効な変形工字文を重視した議論が必要である。現在のところ、変形工字文に関する時間的序列の大枠については共通の認識がえられつつあるが、型式区分をどこで行うかという点においてさまざまな見解があり単純に律しきれない状況がつづいている。

変形工字文の変遷については、青森県牧野Ⅱ〔弘前大学教育学部考古学研究室 1981〕・砂沢〔藤田・矢島ほか 1988・1991〕・剣吉荒町〔工藤 1987〕, 宮城県山王冢〔伊東・須藤 1985〕, 岩手県中神〔須藤 1997〕などの報告において、層位的なデータも加味しながら型式学的な検討が行われてきた。

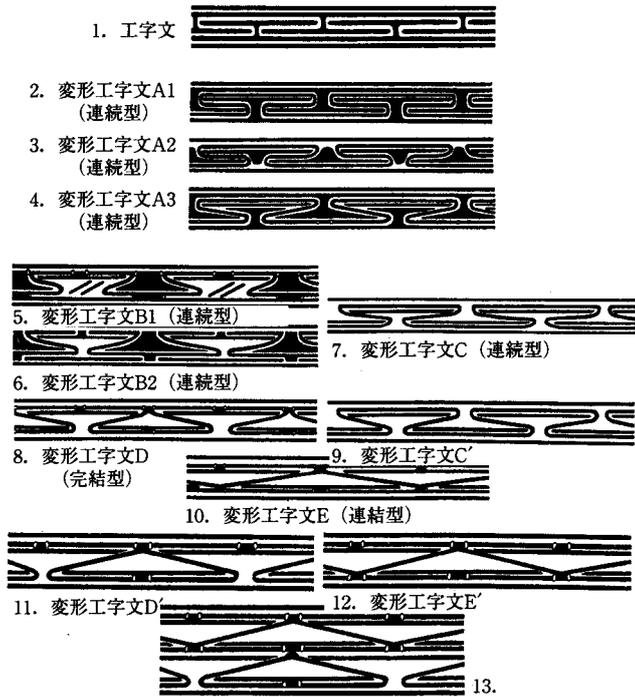
その結果、浮線手法から沈線手法へ、匹字文から三角文へ、という変化の概略がとらえられている。

たとえば工藤竹久 [1987] は、大洞A式の工字文から剣吉荒町Ia群にみられる「変形工字文A類」が発生したとし、砂沢式期にいたるまでの変遷を考えている(第1図)。この区分にもとづけば、「変形工字文A, B」までが浮線手法であり、それ以降が沈線手法となる。ここでは「変形工字文C・D・E」を有する剣吉荒町II群が大洞A'式の古相に位置づけられており、砂沢式は大洞A'式の新段階として扱われている。砂沢式の位置づけに関しては、林謙作 [岡田編 1988]・須藤 [1997] も同様の見解を示している。しかし、

弘前大学教育学部考古学研究室 [1981]、中村 [1988]、藤田・矢島 [1988]、佐藤 [1991]、松本 [1998] らは、砂沢式を大洞A'式に後続する型式として位置づけている。こうした見解の相違は、研究者間における大洞A'式の下限の認識に齟齬が生じていることを端的に示しているといえるだろう。

さらに問題を複雑にしているのは、大洞A'式の上限に関する認識のちがいである。牧野II出土資料には浮線的な表現がみられ基本単位文様間に補助単位文様が充填されるなど、工藤 [1987] のいう「変形工字文B」が非常に多くみられる(牧野II遺跡IIIa類)。牧野II遺跡の報告 [弘前大学教育学部考古学研究室 1981] では、これらは大洞A'式の範疇に含まれており、中村 [1988]・設楽 [1991a] も同様の立場から大洞A'式の古段階に位置づけている。いっぽう鈴木 [1987a]・田部井 [1992] は大洞A<sub>2</sub>式の設定の必要性を主張しており、これにしたがえば浮線的描写による変形匹字文がみられる牧野II遺跡IIIa類は、大洞A<sub>2</sub>式に含まれることになる。大洞A'式は、その上・下限ともに非常に不明確な部分を残したままとり扱われている型式なのであり、その範囲を明確にしなければならないとする中沢 [1991, p. 448] の指摘は重く受け止められなければならない。

もうひとつの問題は、東北内部での並行関係が明確に把握されていない点にある。これまで、砂沢式の特徴として、1) 文様帯幅の拡大、2) 粘土瘤の大型化、3) 太く深い沈線などが注目されてきた。工藤 [1987] や藤田・矢島 [1991, p. 69~71] による模式図を参照しても、これらの特徴が表現されていることがわかる(第1図)。大洞A'式と砂沢式の間にもみられるこのような違いをもとに型式区分を行うか否かは先述の問題につながるが、ここで問題にしたいのはこうした基準が東北地方北部にのみ適用が可能である点である。すなわち、東北中・南部ではこれとはことなつた変形



第1図 工藤(1987)による変形工字文の分類

工字文の変遷がみられるはずなのであり、ここに東北北部と東北中・南部の並行関係が不明瞭となり、ひいては浮線文・条痕文土器群との時間的關係にもいくつかの考え方が生じてきた要因がある。

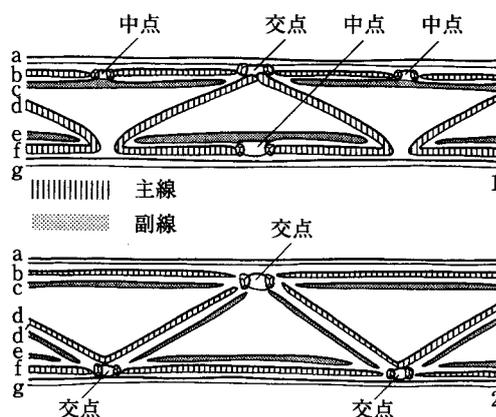
したがって砂沢式を広域編年上に位置づけようとするとき、まず第一に大洞A'式の範囲を定め、第二にそれに前後する時期における東北内部での並行關係を確認することが必須の作業となるのである。

## 2 検討の方法

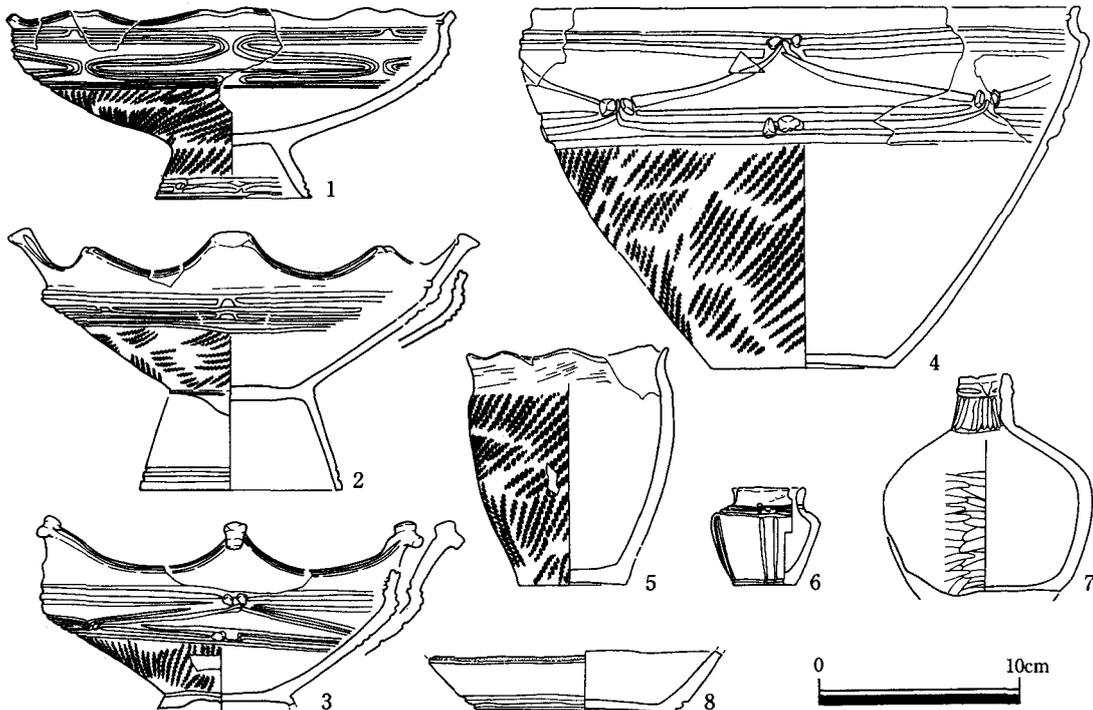
ではわれわれは、これらふたつの課題にどのように取り組むべきなのだろうか。大洞A'式の区分については、まず設定の経緯を振り返り、大洞A'式が本来意味していた範囲を探ることから始めなければならない。もっとも基本的な作業として、山内清男による大洞A'式の内容とのちに大洞A<sub>2</sub>式の設定が示唆された要因を明らかにしたうえで、大洞A'式の範囲についての議論を展開する。

大洞A'式の範囲は山内の分類を後追いつることからしか確定できず、われわれの手許にのこされた資料・文献からどこまでそれが可能なかを確かめる必要がある。ただし、これだけでは問題の解決をはかることができないとき、あるいは現在の問題意識から矛盾が生じるときは、山内の単位をできるだけ拡大解釈しない方針でわれわれ自身が編年網にあらたな意味づけをおこなうしかないはずである。その際、あらたな意味づけの根拠が明示されなければならないことはいうまでもない。かりに山内の範囲が明確になっているのであれば、これによってその妥当性を検証するところから将来の議論を出発させることができるからである。これ以下およびこれ以上の議論は、おそらく生産的な結果を招かないであろう。

東北内部での並行關係の把握については、変形工字文に地域性が明瞭に現れてくる時期を慎重に見定める必要があるといえる。砂沢式が東北北部のみに適用しうる基準によって大洞A'式（あるいは大洞A'式古段階）と区分されているとするならば、その段階にはすでに東北地方のなかに地域差が明瞭に現れていてもよいことになる。こうした地域性の起源を遡り、それがいつから現れてくるのか、あるいは逆に東北地方の共通性はどこまで保たれていたのかという点が重要になってくる。東北の一体性がみられる最後の段階を見いだすことができればそこまでを並行關係とみなし、それ以降は各地域の変遷として検討することができるからである。したがって、東北内部での並行關係を確認するためには、東北地方各地の土器群を点検し、そこにみられる共通の基盤、つまり大洞諸型式の一体性をどこまで認めることができるのかを探りあてなければならないのである。



第2図 変形工字文の構成要素（a～g線は、馬目・古川（1979）によるが、一部改変している）



第3図 大洞貝塚A' 地点出土資料 (東京大学総合博物館保管)

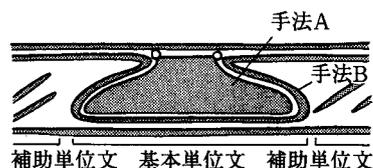
## ②……………大洞A' 式の上限

### 1 大洞A' 式の設定

第一の課題から検討をはじめることにして。[「亀ヶ岡式」]の6型式細分における大洞A' 式は、どのような内容をもっていたのだろうか。細分が発表された当初の大洞A' 式に関する山内清男 [1930] の発言を拾い上げると、工字文の存在 (p. 142), 壺形土器における口縁外面の隆線の存在 (p. 144), 無文の器面上に加えられる彫紋 (p. 151) などの特徴があげられている [山内 1930]。しかし、これらは大洞A式の特徴でもあり、大洞A' 式のみにもみられる特徴としては、頸部・体部文様帯の合体 (p. 143), 少々大型の突起の存在 (p. 143), 点列がない (p. 144), 精製土器における口縁内面沈線の存在 (p. 144) が示されている。また大洞B~A' 式は、若干の地方差がありながらも東北全域に認められるという (p. 145)。

この段階では変形工字文についての言及はなされていないが、のちに山内が編集にたずさわった『日本原始美術1』で「平行線的な工字文が崩れて三角連繋化した変形工字文」[磯崎 1964, p. 171]が大洞A' 式の特徴として言明されることとなる。ここで注意しなければならないのは、『日本原始美術1』のなかで大洞A' 式として図示された資料には「変形工字文C, D, E」(第1図)しかみられない点である。それらは沈線表現による主線と副線(第2図)を組み合わせたものであり、浮線手法による「変形工字文A, B」をまったく含んでいないのである。また、山内がたびた

び引用してきた「亀ヶ岡式精製土器の文様帯を示す模型図」(第8図)では、一貫して「変形工字文E」のみが図示されている点も見逃せない。これらを厳密に解釈するならば、工藤[1987]のいう「変形工字文A, B」は変形工字文の仲間を含めることはできないはずである。



第4図 変形匹字文の構成要素  
(名称は鈴木〈1987a〉にしたがった)

つぎに、標準資料である大洞貝塚A'地点出土土器の内容を見てみよう。標準資料は中村[1988]・設楽[1991a]・須藤[1997]らによってすでに紹介されており、時間的に幅のある資料と認識されている。第3図は、現存する大洞貝塚A'地点出土資料の全点である。このなかには「変形工字文A3」をもつ資料が1点含まれており(第3図1)、大洞A'式の上限はこの標本をどう考えるかに左右される[設楽1991a, p.215]。すでにみたように山内が執筆・編集に関与した文献において、「変形工字文A, B」をもつものが大洞A'式としてとりあげられたことはなかった点を尊重すれば、これを大洞A'式にふくめるのはやはり拡大解釈につながるのではないだろうか。

ではこれらの土器群は、どこに位置づければよいのか。工藤[1987]は「変形工字文A, B」を有する剣吉荒町Ia・Ib群を大洞A式と大洞A'式のあいだと考えているが、比定される型式の断定は避けている。また、牧野II遺跡の報文[弘前大学教育学部考古学研究室1981]、鳥内遺跡の報文[芳賀1998]、中村[1988]、設楽[1991a]らの見解では、これらは大洞A'式の古い部分にふくまれている。たしかに頸・体部文様帯の合体がみられるため、大洞A式とすることはできない。しかし、厳密な意味での変形工字文が完成していない段階であり突起も非常に小さいため、山内が列挙した大洞A'式の特徴からははずれてしまうのである。この脈絡において重要性を帯びてくるのが、大洞A<sub>2</sub>式の存在なのである。

## 2 大洞A<sub>2</sub>式から大洞A'式へ

山内は大洞諸型式の9細分案を表明した際に、大洞A<sub>2</sub>式の特徴として文様帯の狭小化を指摘した[平山ほか1971]。これをうけて鈴木[1987a]・田部井[1992]は、大洞A式の工字文と大洞A'式の変形工字文のあいだに存在するヒアタスを埋める型式として、大洞A<sub>2</sub>式の設定を重要な課題として認識している。これは大洞A'式の上限の確定にかかわる重要な問題であり、ここで大洞A<sub>2</sub>式と大洞A'式の区分問題に分け入る必要が生じてくる。

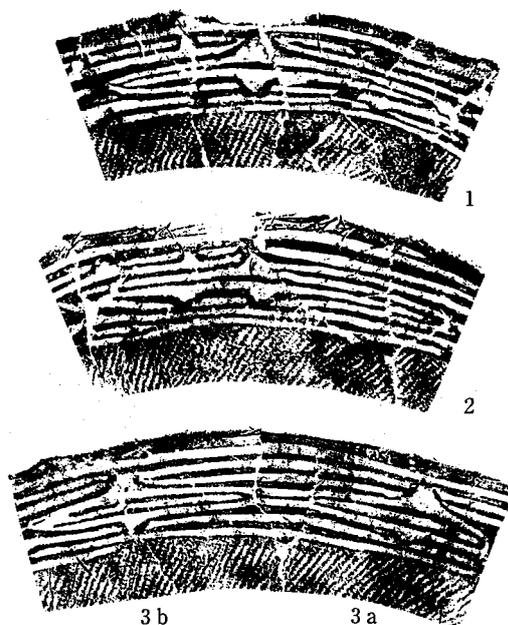
鈴木[1987a]は大洞A<sub>2</sub>式の変形匹字文から大洞A'式の変形工字文が発生したとし、その変遷プロセスをつぎのように説明する。変形匹字文は、基本単位文としての三角文と補助単位文としての斜行沈線により構成され、いまのところ層位的な検証例はないものの型式学的にみて補助単位文を有するものが古いと考えられている[弘前大学教育学部考古学研究室1981, 小林1988]。このうち基本単位文は「三角区画内の抉り出し(手法A)」とそれに「必ず対になる輪郭沈線文(手法B)」によって描出される(第4図)。これが、大洞A<sub>2</sub>式にみられる典型的な変形匹字文である。しかし、第5図1面では、「手法A」の三角文を描出したのちに「手法B」をとることなく、その下部に馬目・古川[1970]のいうe・f線(第2図)を配することによってより大きな一単位が形成されてい

る。そしてe線には匹字文が付属している。2面もほぼ同様であるが、e線の下方に付属する匹字文が2カ所ある点がことなっている。ここでも「手法B」を形成するはずであった沈線は平行沈線化し、匹字文をともなっている。3a・3b面では「手法A」の端部どうしが沈線でつながるいっぽう、やはり「手法B」を形成するはずであった上部の沈線はc線との融合を果たしている。これが鈴木 [1987a] のいう最古の変形工字文（霊山根古屋1式）の例である。

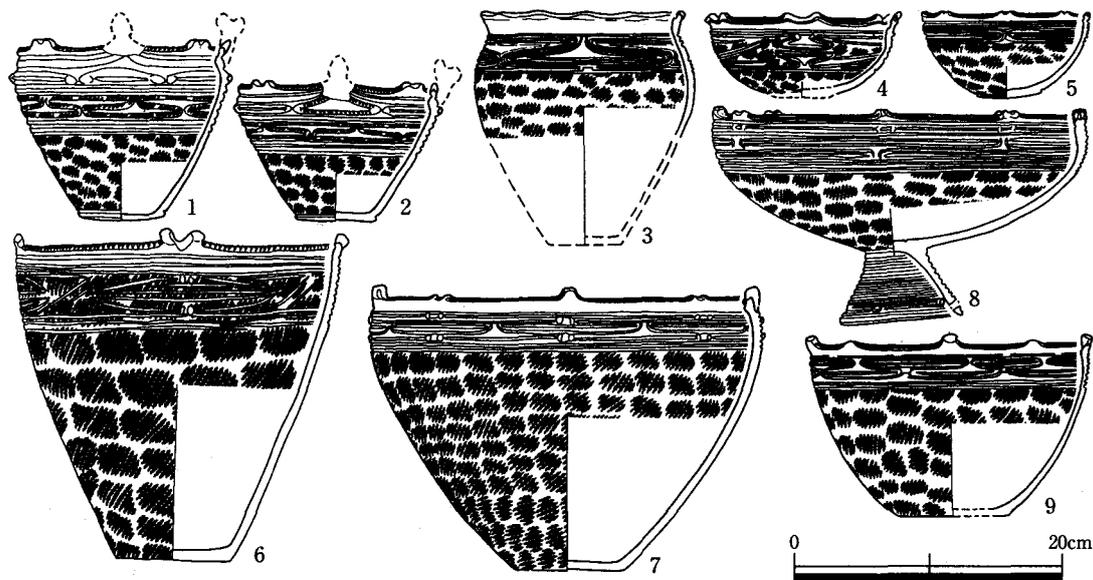
鈴木 [1987a] は、このように「手法B」が平行沈線化し「輪郭沈線文」としての意義をうしなした段階を大洞A'式古古段階に、さらに「手法A」までもが沈線化した段階を大洞A'式古段階に位置づけている。「手法A」までもが沈線化すれば、大洞A'式にみられる典型的な変形工字文につながる事が理解できるであろう。浮線手法から沈線手法への変遷は層位的に動かしがたく、そのあいだに変形匹字文が急速に沈線化する画期があるとすれば、これをメルクマールとした変形工字文の完成は時間的階梯の区切りとしての意味をもつことが十分に考えられる。

工字文から変形工字文が生じるためには、変形匹字文の段階が介在しなければならないことは、山形県北柳1遺跡2ブロックを検討した小林・大泉 [1997] によっても述べられている。また、宮城県山王冨遺跡 [伊東・須藤 1985] ではVa・k層が大洞A<sub>2</sub>式の段階としてとらえられる可能性が考えられてきたが、近年の岩手県中神遺跡の調査においても大洞A<sub>2</sub>式の段階が層位的にとらえられることが確認された [須藤 1997]。中神遺跡の北斜面包含層C北区では、上層の3～13層で山王Ⅲ層式、14層で青木畑式、16層で大洞A'式、17～19層で大洞A<sub>2</sub>式、20～21層で大洞A<sub>1</sub>式が出土している。北斜面包含層A東区では、32層～39層から出土したとされる土器の帰属層が詳述されていないため判然としないが、ここでも大洞A<sub>2</sub>式の段階が層位的にとらえられる可能性がある。こうした近年の発掘成果は、大洞A<sub>2</sub>式の設定を支持していると考えられるであろう。よって、ここでは頸・体部文様帯の合体がみとめられるにもかかわらず、変形工字文が完成していない階梯として大洞A<sub>2</sub>式をあつかい、大洞A<sub>1</sub>式と大洞A'式のあいだに位置づけることにする。<sup>(1)</sup>

従来、変形工字文が工字文との系統関係を有していると漠然と考えられながらもその成立過程が不明確であり、実際に工字文からの変遷を示す資料が非常に乏しかった。しかし、鈴木 (1987a) が変形匹字文の沈線化を介在させることによって、変形工字文の具体的な成立過程の説明を試みた点は評価されてしかるべきであろう。ただし、鈴木 の考えとは若干ことなる変形工字文の成立過程の説明も可能である。鈴木によって着目された根古屋例1・2面（第5図）では、「手法B」が沈線化してc線となり、「手法A」の下部にe線やf線が配置され、大きな三角文が形成されるととら



第5図 根古屋遺跡第9土坑出土土器拓影図  
(鈴木 [1987a] より作成)



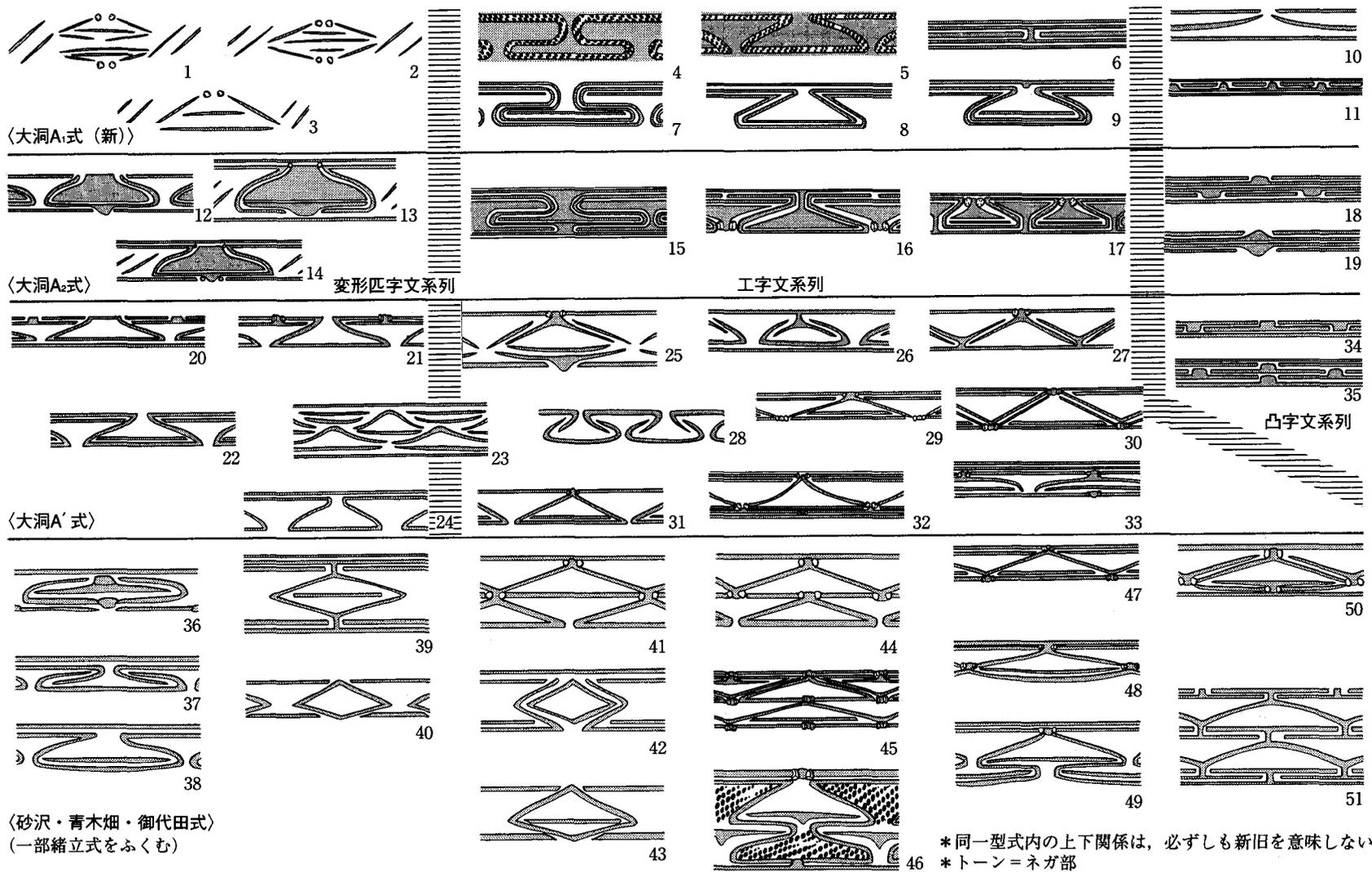
第6図 九年橋遺跡第11次調査出土資料（藤村編〈1988〉より）

えられている。鈴木が注目しているように、c線が三角文頂部（「手法A」の頂部）にそったかたちで曲がっているのは、「手法B」とのつながりを示す証拠とはなるだろう。しかし、f線がe線に付属する匹字文を包み込んでいる点を考えるならば、「手法A」と「手法B」の下部が融合して、大きな一単位が形成されているととらえることも可能である。この場合、「手法B」はその上部でc線と融合しているとみるわけである。いまのところ、どちらの解釈が正しいかの判断はしかねるが、根古屋第9号土坑例がきわめて古い変形工字文であることはうごかしがたい。

### 3 文様の系列化

ではこうしたモデルによって、すべての変形工字文の成立が説明できるだろうか。もしすべての変形工字文がこのようなプロセスで発生しているとすれば、「変形工字文A」[工藤 1987] からの変形工字文の生成は望めないことになる。しかし剣吉荒町などには、「変形工字文A3」に類似する工字文的なすがたをのこす変形工字文があり、これを単に簡略化がすすんだものとして見過ごすわけにはゆかないというのが筆者の考えである。そこで工藤 [1987] のいう「変形工字文A」が大洞A<sub>2</sub>式のなかでどのような位置を占め、その後どのような変遷を見せるのか、この点も考慮しながら変形工字文の成立過程に潜むもう一つの側面を明らかにしてみよう。

「変形工字文A」の位置づけから推して、工藤 [1987] はそれを典型的な変形匹字文（「変形工字文B」）よりも古く位置づけていると考えられる。ところで、「変形工字文B」はそのモチーフと基本・補助単位文の配置からみて、大洞A<sub>1</sub>式の特殊工字文 [高橋 1993] の一部と直接的な系譜関係にあり（第6図6、第7図1～3）、これに三角文内部の挟り込み（「手法A」）がくわわって成立したと考えられる。しかし、「手法A」は工藤 [1987] のいう「変形工字文A」からの影響としなければ説明がつかない事象である。したがって「変形工字文A」と「変形工字文B」を時間差としてとらえるには無理があり、むしろ両者は時間的に並行する部分をもちつつ別の系統関係にあった



第7図 変形工字文の変遷模式図

文様ととらえるべきなのである。

したがって、大洞貝塚A'地点出土資料の一部(第3図1)に関しても、これを大洞A<sub>2</sub>式よりも古く位置づける[須藤 1998, p.266] 必要はないだろう。さらにここでは、第三の系列として「根古屋型工字文I~IV類」[志賀 1986] を時間的に再構成した凸字文系列をくわえ、当該期の文様をつぎのように整理する(第7図)。

#### (1) 変形匹字文系列

典型的な変形匹字文からの系統発生的な連鎖をさす。基本的なモチーフは三角文であり、主線・副線の区別が明確である。補助単位文や小さな粘土粒の貼付は、この系列にとくに顕著である。設楽[1991a]は根古屋遺跡出土土器群の分析にあたり、東北中・南部の土器群をおもな対象として文様の系列化をおこなっている。そこでの分類にしたがえば、本系列は「入組匹字文系」の一部ということになる。

#### (2) 工字文系列

工字文からの系統発生的な連鎖をさす。基本的なモチーフは流水的な工字文・入組文的なモチーフで、これが横位に連鎖する文様構成をとる。主線・副線の区分が発達せず、補助単位文はみられない。二個一対の大きな粘土粒が付けられる場合は、比較的近い距離に施される。設楽(1991a)による「工字文系」の一部にあたる。

#### (3) 凸字文系列

「根古屋型工字文I~IV類」[志賀 1986]からの系統発生的な連鎖をさす。ほんらい「匹字文系列」とよぶのがふさわしいが、変形匹字文系列との区分がまぎらわしいのでネガ部に着目したこの名称を用いる。並行沈線間に、上向きあるいは下向きの凸字状のモチーフが貫入する。設楽[1991a]による「匹字文系」の一部に相当する。

### 4 変形工字文の多元的発生

これらの系列は大洞A<sub>2</sub>~大洞A'式期に相互に影響しあっており、とりわけ変形匹字文系列と工字文系列の二者は変形工字文の成立にも深く関与している。結論をやや先取りすれば、東北地方における文様の地域性はこれらの系列の量的比率や、それらが織りなす影響関係などが複雑に絡んで生起しており、その過程でさまざまな中間形態を生み出しながら変遷を遂げている。若干の具体例をみてみよう。

大洞A'式には、上部の平行線から垂下する二マタのモチーフを下から包み込む沈線を配したり、頂部のひらいた三角文を組み合わせて配置する「入組型」とでも称すべき変形工字文がみられる(第7図25~27)。こうした変形工字文には主線が上部平行線と接着しているものがみられ、工字文系列内での成立が想定できる。とくに第7図16・17の「手法A」が沈線化することで第7図25・26への連鎖があとづけられ、「手法B」と下方からのびる「手法A」の沈線化と融合によって第7図27の成立が説明できる。後者の場合、結果的に三角文斜位部分が複数の沈線によって描かれることになる点は、後述するように青木畑式や砂沢式の新しい段階の変形工字文へも影響を与えていると考えられるのである(第7図45・50)。この系列は第7図29・30のような定型化した「連結型」の文様構成を生み出し、いっぽうで変形匹字文系列の影響をうけつつ第7図28のような簡略化がす

すんだものにも深く関与している。さらに変形工字文にしばしばみられる二個一対の粘土瘤については、離れた位置に小さなものが付される変形匹字文系列よりも、近い位置に比較的大きなものが付される工字文系列との関係が深いと考えることもできる。

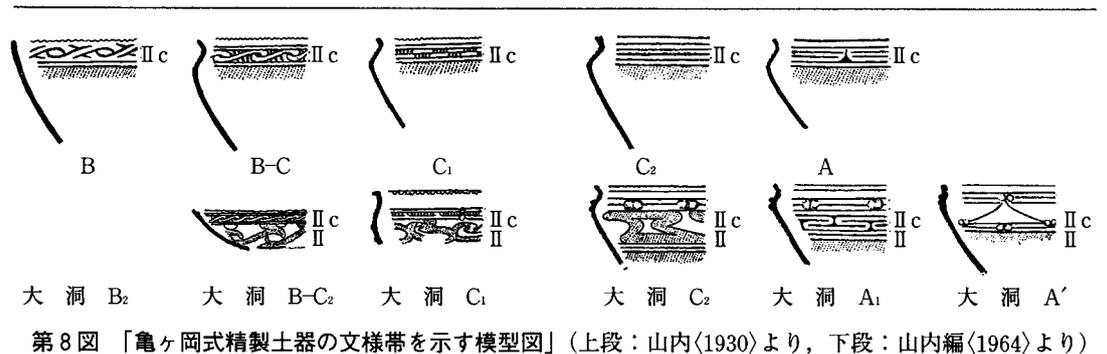
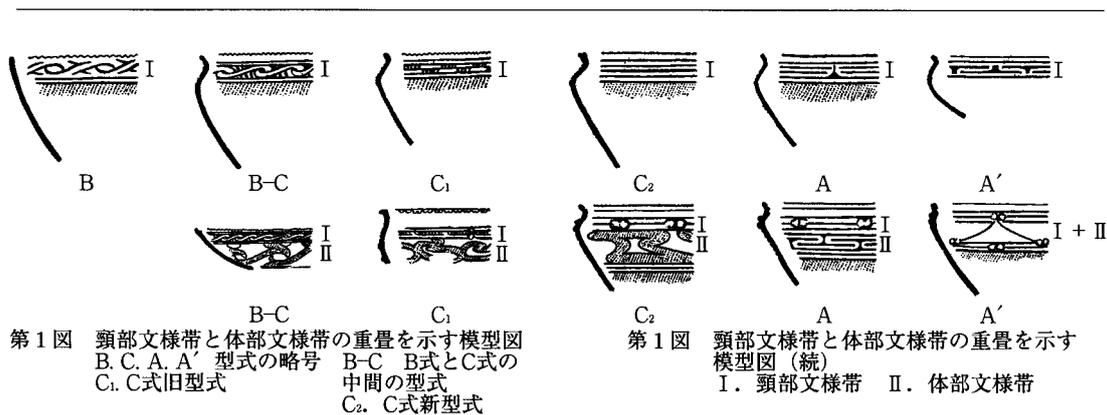
横位に三角文を反転させる「変形工字文C・C'」の基本的な文様構成法は、変形匹字文系列にきわめてちかい。また、主線が変形匹字文の名残をのこした1本の沈線によって描かれたり、副線が変形匹字文と同様の位置に付される点も(第7図20・21)、これらが変形匹字文系列に属していることを示している。変形工字文の副線のうち、主線の斜位部分に沿うものは工字文系列との関連で生じていたが、水平線部分にともなうものについては変形匹字文系列の変遷のなかで定式化した可能性がつよい。すでにみた根古屋第9号土坑例は変形工字文系列に属しているので、これは鈴木[1987a]の議論とも符合する。もちろんこの影響は工字文系列にも及んでおり、第7図29・30などにもほとんど例外なくとりいれられている。また「変形工字文D」は、工字文系列の文様構成と、変形匹字文系列の副線の位置がとりいれられた中間形態と考えられるが、完結型変形工字文として急速に普及するのである。

このように筆者は、文様の沈線化をもって変形工字文の完成とする鈴木[1987a]の基準は受け入れつつも、変形工字文の発生を変形匹字文・工字文系列が関与して多元的に発生したものにとらえる。磯崎[1975, p.58-59]は、「大洞A式の中に極く少数ではあるが磨消縄文の手法を伴った文様が混って」いることを指摘している。これをもとに「この種のモチーフの中には大洞A'式と寸分違わぬ構図も認められるのであって……(中略)……大洞A'式の変形工字文が、大洞A式の工字文より発展生成したと考えるよりも、むしろ、この曲線的な構図を持った文様からの転化とした方が、型式学的にも、よりスムーズな発達の軌跡を描くことが出来るのではないか」と述べている。磯崎が第6図1・2にしめすような、大洞A'式より古い資料からの変形工字文の生成を予測していたとするならば、ここでいう工字文系列との関連で注目される発言であるといえよう。

## 5 大洞A<sub>2</sub>式設定の意義

ここで、大洞A<sub>2</sub>式とその前後型式との関係についても考察しておく必要がある。藤村[1980]は山内が再三にわたって図示した「模型図」の変更点を指摘し、とくに大洞A'式上段の図が削除された経緯を重視して大洞A'式の内容が途中で変更されたと理解している(第8図)。しかし、飯塚[1989]が的確に指摘しているように、この削除は大洞A'式の内容の改定ではなく文様帯の理解の変化、あるいは山内の考える文様帯系統論の確定に起因しているのである。大洞A'式上段の標本の文様帯は「IIc」ではなく「II」なのであり、この意味で大洞A<sub>2</sub>式上段[山内編1964, 山内1972]の図との連続性をしめすことができないために削除されたと解釈するのが妥当であろう。さらに大洞A'式下段に掲げられている変形工字文を有する標本が一貫して大洞A'式でありつづけた点を考え合わせれば、大洞A'式の内容が変更されたと考えるわけにはゆかなくなる。「大洞A'式の標本の指標性は、すぐれて明確といえる」[飯塚1989, p.92]のであり、これは同時に変形匹字文を大洞A'式の古相には含められない傍証ともなるであろう。

大洞A'式の範囲に改定がなかったとすれば、大洞A<sub>2</sub>式の設定は大洞A'式の範囲をせばめたことを意味しているのではなく、大洞A<sub>2</sub>式とA'式のあいだにまったく新しい型式を挿入したと考えな



ければならなくなる [鈴木 1987a, p.126]。大洞A<sub>2</sub>式は頸部文様帯をもたないため大洞A<sub>1</sub>式に含めることはできないし，変形工字文をもたないために大洞A'式とすることもできない。こうした問題を認識していたからこそ山内は大洞A<sub>2</sub>式の特徴を述べ [平山ほか 1971]，実際に大洞A<sub>1</sub>式との区別を遂行していたと考えられるのである [山内編 1964, 山内 1972]。

中村 [1988, 1990] は，山内が浮線文土器との関係から大洞A<sub>2</sub>式の理解に苦しんだ経過を振り返っている。そして中村自身は大洞A<sub>2</sub>式の基準資料が未発表なことから，むしろ大洞A式と大洞A'式の区分を問題視している。これは，大洞貝塚A'地点出土土器はすべて大洞A'式であるという前提にたった場合の当然の帰結といえる。しかし，大洞諸型式の基準資料が大洞貝塚のそれぞれの地点から出土した土器の「主要なもの」[山内 1930, p.141] でしかない以上，そうした前提を無批判に受け入れるには危険が伴う。また，第3図1の資料の位置づけが，あえて避けられていた可能性も考えられる。これも，ここで大洞A<sub>2</sub>式の設定を認め，第3図1の資料を大洞A<sub>2</sub>式と考えようとする根拠である。

大洞A<sub>2</sub>式の設定が遅れたのは，1930年の段階で「亀ヶ岡式の文様を頸部と体部の文様をあげてその変遷を非常に簡単にしめた(傍点筆者)」[平山ほか 1971, p.71] からである。しかし「中間の形式がみつかってBの前にもう一つ，BとBCの間にもう一つ，それからAの段階のあとにもう一つ，AとA'のあいだにですわね……(傍点筆者)」[平山ほか 1971, p.71] という理解にいたり，最終的に「形式としてはB<sub>1</sub>, B<sub>2</sub>してるんです。それからBC<sub>1</sub>にしてBC<sub>2</sub>にして，C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>で，Aの次にA<sub>2</sub>とやっちゃうんです。その次がA'」[平山ほか 1971, p.72] となるのである。大洞A<sub>2</sub>式が「みつかった」と表現されている点は，この型式が大洞A, A'式のなかから独立したわけではないこと

を雄弁に物語っている。

### ③……………大洞A'式直後の土器群

変形工字文の完成をメルクマールとすることで、大洞A'式の上限は確定する。大洞A'式の下限の認識は、砂沢・青木畑・御代田式などの地域色に富んだ土器群がからんでより複雑である。ここでは東北各地における大洞A'式の下限とその直後と考えられる土器群への変化をとらえ、地域性の根源をさぐるための基礎的なデータを提示する。

#### 1 東北北部 (第9図)

##### (1) 砂沢式の内容とその評価

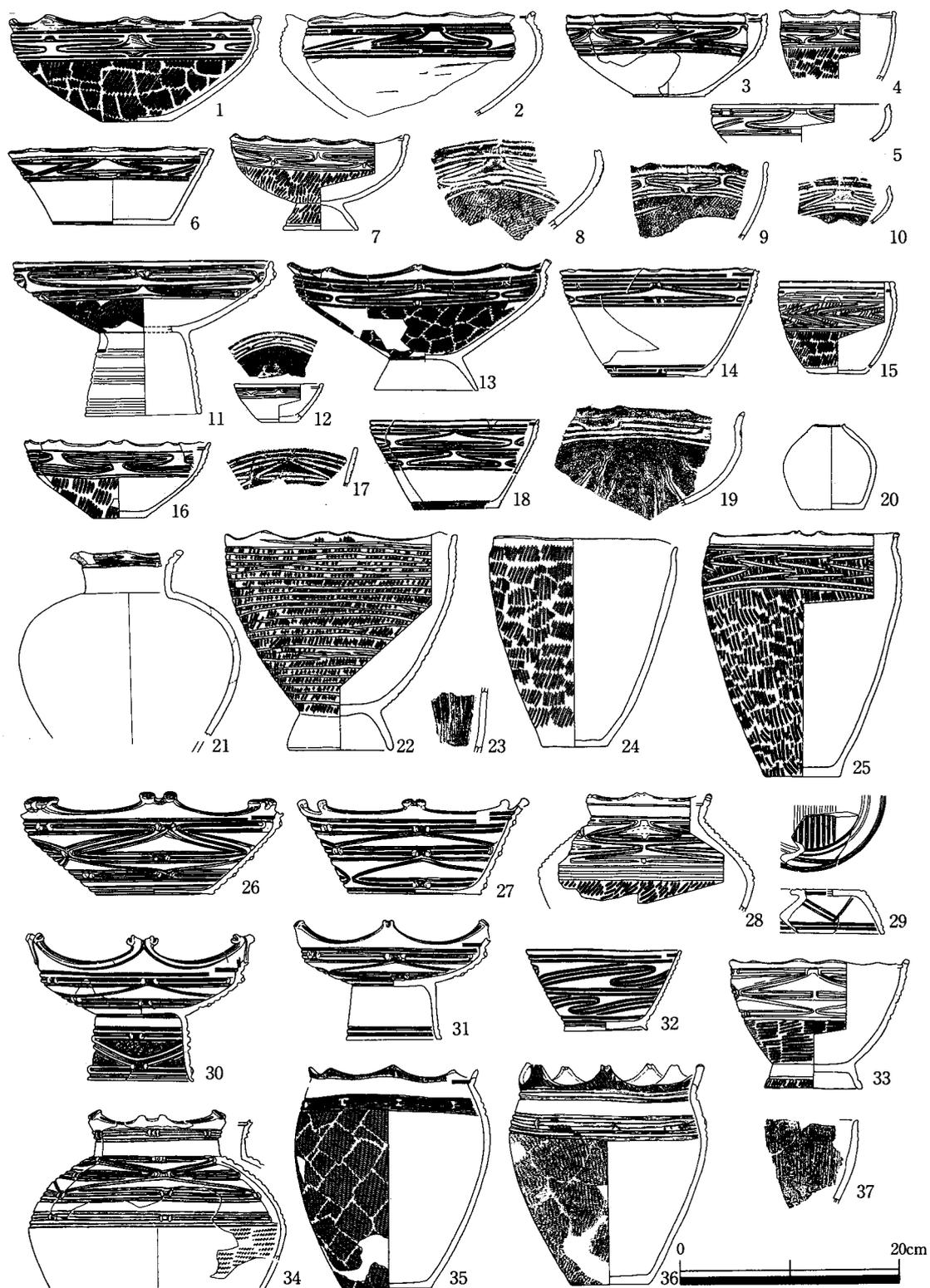
東北地方北部の大洞A'式の例としては、青森県剣吉荒町[鈴木編 1988]・砂沢[藤田・矢島 1988・1991]・咽畑[松山ほか 1979]、秋田県湯ノ沢A[菅原編 1984]・鎧田[山下・鍋倉 1974]・平鹿[児玉 1983]・諏訪台C[利部・和泉 1990]、岩手県大日向II[田鎖 1995]などがあげられる。多段構成による変形工字文は大洞A<sub>2</sub>式の文様構成とは連絡しないので、この出現をもって大洞A'式の新相を認識することができる。なお、鈴木[1987a]のいう大洞A'式(古古段階)は、東北全域に共通してみられる資料の僅少性から時間的階梯として設定することにはいまのところ無理があり、古段階に含めておくのが妥当である。

大洞A'式よりもあたらしい特徴を有していると考えられてきたのが砂沢式[芹沢 1960]であり、青森県砂沢[藤田・矢島 1988・1991]・是川中居[工藤・高島 1986]・是川堀田[宇部 1980]・松石橋[工藤 1987]・畑内[木村ほか 1997]・宇田野(2)[白鳥ほか 1997]、秋田県地蔵田B[菅原編 1986]・諏訪台C[利部・和泉 1990]などで良好な資料の出土がみられる。『日本原始美術1』[山内編 1964]における図版、および磯崎[1964]による解説を考え合わせれば、山内清男も砂沢式を大洞A'式のなかにふくめていたことが窺える。先述のとおり、砂沢式では1)文様帯幅の拡大、2)粘土瘤の大型化、3)太く深い沈線が顕著に認められるようになる。こうした属性が大洞A'式のなかでも新しくなることは剣吉荒町・砂沢遺跡で層位的に確認されてはいるものの、大洞A'式との区分を行うか否かは依然として決着をみていない。

これまで型式区分を否定する根拠として、砂沢式の特徴が大洞A'式との「程度の違い」[岡田編 1988, p.49]しか表していないという点が強調されてきた。しかし松本[1998]は上記の属性の数量化が大洞A'式と砂沢式の分離に有効であり、とくに浅鉢・高坏類における文様帯の占める割合が器高の50%に達しているかどうかによって区分しうることを明らかにした。筆者もまた、砂沢式にみられる特徴は単なる「程度の差」にとどまらず質的な差も多く存在していることから、砂沢式がひとつの画期を形成していることは確実であると考えている。そこで便宜的に「剣吉荒町II群段階」と「砂沢段階」を分けたうえで、前者から後者へどのような変化がみられるのかを考えてみることにしたい。

##### (2) 「剣吉荒町II群段階」から「砂沢段階」へ

a) 変形工字文の変化 変形工字文にみられる変化としてあげられるのは、1) 半単位ずれた多段



第9図 東北部の土器群 (1・13・22・26・27・29～31・35・37砂沢〈藤田・矢島 1988・1991〉, 2牧野Ⅱ〈弘前大学教育学部考古学研究室 1981〉, 3～10・12・14～20・23～25・28・32・33剣吉荒町〈鈴木編 1988, 滝沢・工藤 1984〉, 11・36諏訪台C〈利部・和泉 1990〉, 21畑内〈木村ほか 1997〉, 34是川中居〈工藤・高島 1986〉)

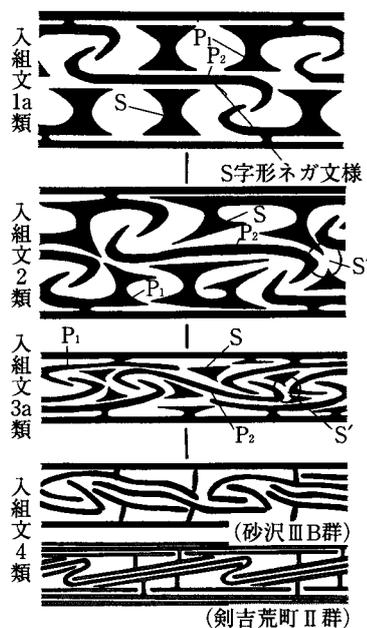
構成の一般化，2) 粘土瘤間調整の消滅である。大洞A'式新段階に多段構成が出現するという鈴木 [1987a, p.119] の指摘は妥当であり，これは東北北部においてもあてはまる。「剣吉荒町Ⅱ群段階」にみられる多段構成は，縦位に三角形を反転させることによってつくられているが(第9図18)，「砂沢段階」では連結型の下に連結型もしくは完結型を配した二段構成が普及する。このとき上段の変形工字文の交点を，下段の変形工字文の頂点と共有させることによって上下で半単位がずれた構成になる(第9図26・33・34)。

また，「剣吉荒町Ⅱ群段階」では変形工字文の主線が粘土瘤の間にまで入り込むものが多数含まれており，粘土瘤間の調整はまさに沈線の一部として処理されている。これにたいして「砂沢段階」では粘土瘤の大型化と沈線幅の拡大にともない，粘土瘤間の調整は変形工字文の主線文から切り離されてしまう。この結果，粘土瘤間の調整はまったく行われなくなる。

「砂沢段階」になると，変形匹字文系列・工字文系列の相互干渉からさまざまな構成の変形工字文が生成されるため，もはや系列の区分は困難となる。しかし，東北北部では大洞A'式(「剣吉荒町Ⅱ群段階」)の変形工字文の特徴が東北中・南部よりもよく受け継がれ，主線斜位部分に副線がともなわないものが多い(第9図27・30・31)。ここに副線が加わってくるのは工字文系列が優勢である東北中部からの影響と考えられるが，こうした影響は砂沢期の全般にわたっているわけではなく，おそらく新しい段階にはいつてからである(第9図26・34)。したがって主線の複線化をメルクマールとして，将来「砂沢段階」にも新古ふたつの段階をみとめうる可能性が指摘できる。こうした考え方をすれば，三角文の内部をやや彫り込み，浮線的な表現となる変形工字文は，複線化が進んだ段階であることがわかる。この種の変形工字文を有する是川中居(第9図34)の土器群は，中村 [1988] のように「砂沢段階」の最古段階に位置づけるのではなく，むしろあたらしい段階を含んでいるとみるべきではないだろうか。

**b) 波状工字文の完成** 工藤 [1987] は大洞A'式にみられる矢羽根状モチーフを手がかりに，波状工字文(波状文)の発生過程を論じている。これに対して福田 [1997] は，大洞A<sub>1</sub>~A'式期にみられる入組文3a・4類(第10図)から，波状工字文が成立するプロセスを説いて<sup>(2)</sup>る。福田の指摘によって，二枚橋式古段階 [高瀬 1998] の波状工字文の主線・副線にしばしばみられる沈線のとぎれは，入組文における上下の沈線との連結部の残存と解釈できることになった。この考えは，波状工字文の成立過程に関するもっとも有力な説明であることはうたがいない。

ただし，波状工字文が右上がりだけに集中する点は，入組文からの系譜関係だけでは説明が難しい。筆者は大洞A'式の矢羽根状モチーフ [工藤 1987]・斜行沈線 [中村 1988]，荒海式の特異な変形工字文 [西村 1975, p.16] にみられる「右上がり志向」の存在から，基本的には福田の考え方を踏襲しながらも，これを加味して考えなければならないと考える。いずれにせよ，遊離のない主線



第10図 福田 (1997) による波状工字文の成立過程 (P = 主要素, S = 副要素, S' = 入組間要素)

とそれに併走する副線を要素とし、しかも上下の横走沈線との連結部がなくなった波状工字文（第9図32）は、「砂沢段階」にいたって完成することは間違いないだろう。

c) **その他の文様の変化** 「砂沢段階」の浅鉢には変形工字文が胴上半部に限られるものがあるが、その下の無文部にも積極的に横走沈線が入るようになる。これは本来底部に近い部分に描かれていた沈線が分離・上昇してきたものと考えられるが、これも文様帯の拡大と関連をもつ現象として注意される。この特徴は青木畑式の浅鉢にも認められ、東北中部との対比のうえで重要な意味をもってくる。

「剣吉荒町Ⅱ群段階」までの深鉢には頸部無文帯はみられないが、「砂沢段階」には狭いながらも意識的に無文帯が形成される傾向がある（第9図35・36）。山内〔1930, p.144〕が指摘しているように、大洞A'式で頸・体部文様帯の合体が生じて、壺には頸部文様帯はのこりつづける（第9図21）。この影響をうけ、「砂沢段階」ではとくに深鉢において頸部文様帯の復活が顕著にみられ、頸部に狭い無文帯をはさんで肩・胴部に沈線文が描かれるようになるのである。ここでの頸部文様帯には地紋・キザミ・沈線・列点の充填などがみられ、より新しい二枚橋式〔須藤 1970〕などでは弧線文なども加わってくる。このほか高坏・浅鉢では波状口縁の大型化にともなって、突起の頂部に装飾がつけられるようになるが、これも鉢類における頸部文様帯の復活とまったく無関係ではないはずである（第9図30）。

大洞A'式までは系統性をトレースすることができた凸字文系列は、砂沢式期にはその影をほとんど潜めるようになる。平行沈線間に二個一対の粘土粒を有するものがこれとのつながりを示しているかもしれないが、これは変形工字文の midpoint として大洞A'式期から存在しており、ここでは凸字文系列の中には含めてはいない。

d) **器形の変化** 「剣吉荒町Ⅱ群段階」の浅鉢は、比較的大きく開く器壁をもち、口縁部で直立あるいはやや内傾する（第9図12・14・16・18）。胴部は、ゆるやかに丸みを帯びている場合が多い。「砂沢段階」では直線あるいはやや外反気味に立ち上がる器形が多い（第9図27）。口縁部が直立する場合もあるが、胴部は「剣吉荒町Ⅱ群段階」のように丸みを帯びない（第9図26）。

「剣吉荒町Ⅱ群段階」の高坏胴部も、やや丸みを帯びる（第9図11・13）。台部は大きく開き、高さが比較的低いのは、大洞A<sub>2</sub>式から継続してみられる特徴である〔弘前大学教育学部考古学研究室 1981, p.33〕。「砂沢段階」では胴部は直線的になり、台部はほとんど開かず、まっすぐに下におりようになる（第9図30・31）。

「剣吉荒町Ⅱ群段階」の深鉢には、大きくふたつの種類を認めることができる。ひとつは、器壁がやや丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部で直立あるいは内傾するきわめてシンプルなものである。これには口縁部に数条の沈線が付されるほかは文様はなく、縄文か条痕がみられる（第9図24）。いまひとつは頸部でやや屈曲して口縁部がひらくものであり、頸部から口縁部にかけて沈線文が付され、体部には縄文がほどこされる（第9図25）。「砂沢段階」になると前者が非常に少なくなるいっぽうで後者が増加し、「遠賀川系甕」の影響をうけて頸部により強い屈曲をもつものも増加する。またあらゆる器種にいえることであるが、「砂沢段階」では相対的な突起の大型化が引き起こされる。

ここまで述べてきた「剣吉荒町Ⅱ群」と「砂沢段階」のちがいは、重要な文様・文様構成の成立

あるいは器形のちがいに着目した質的な変化であり、これによって両者のあいだの時間的変遷は追認される。同時にそれぞれは型式として分離されるに十分な基準をみたしていると考えるが、その前に隣接地域との型式論的な秩序を維持する作業が必要である。そこで「剣吉荒町Ⅱ群段階」と「砂沢段階」の分離問題をいったん保留し、東北中・南部の様子をつづけて概観してみることにする。

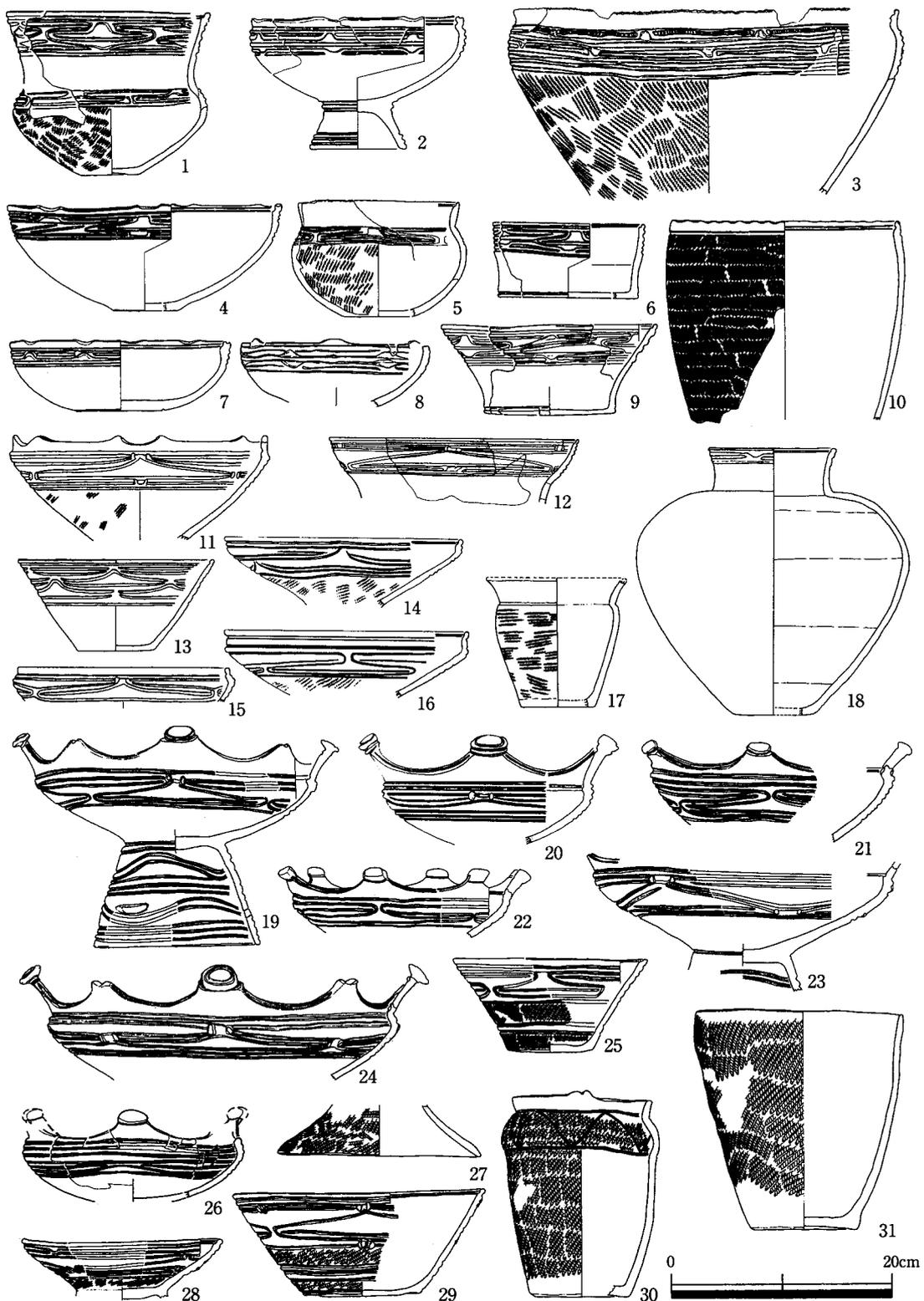
## 2 東北中部 (第11図)

### (1) 青木畑式の内容

東北中部における大洞A<sub>2</sub>式としては、岩手県大洞貝塚A'地点出土資料の一部(第3図1)、宮城県梁瀬浦[角田市教育委員会1976]・巻堀[一迫町教育委員会1977]・赤生津[佐藤編1990]・二月田貝塚[後藤1972]、山形県蟹沢[加藤1965]・げんだい[安部・月山1988]・北柳1[2aブロック, 小林・大泉1997]などの出土資料をあげることができる。中村[1988]は、巻堀を剣吉荒町Ⅰb群、梁瀬浦を剣吉荒町Ⅱ群に並行させているが、梁瀬浦では変形工字文が完成していないことから剣吉荒町Ⅱ群よりは古く位置づけるべきである。変形匹字文は東北北部のものときわめて類似しており、共通性が非常に高い。ただし器形のうへでは、東北北部とは明瞭な地域差を示している(第11図1~10)。

大洞A'式に相当する東北中部の土器群は、宮城県宮沢[斉藤・高橋・真山1980]、岩手県熊穴洞窟[小田野編1985]・杉の堂[伊藤・佐久間・西野1982]・下船渡[江坂1961]、山形県神矢田遺跡[佐藤・佐藤1972]・にひやく寺[安部1985]・北柳1[2b・4a・4bブロック, 小林・大泉1997]などの出土資料があげられる。変形工字文には第11図15のような工字文系列に属する「入組型」変形工字文もみられるが、これはおそらく完成直後のふるい変形工字文であろう。連結型の出現は工字文系列の中で生じるが、下方からの「手法A」のすがたをのこすものを経て(第7図27)、定式化した連結型(第7図29・30)が完成するものとみられる。東北北部でもおなじプロセスをたどると考えられるが、後述するように東北南部の連結型については関東地方との関係が強い点は注意を要する。器形のうへでは、やはり東北北部とは異なったものもみられる(第11図12)。

これに後続する型式として考えられているのが、青木畑式である。加藤[1982]は山王圀遺跡との比較から、青木畑遺跡出土土器を山王Ⅳ層とⅢ層出土土器の中間に位置づけた。そこでは山王Ⅳ層出土土器は大洞A式に比定されているが、山王Ⅳ・m層[伊東・須藤1985]の土器には明確な変形工字文がともなうことから大洞A'式とすべきである。したがって、青木畑式は大洞A'式直後かつ山王Ⅲ層式[須藤1983]以前に位置づけられることになり、東北中部ではいまのところこれらの間にあらたな型式が加わる余地はないと思われる。宮城県南部ではややことなる変遷がみられ、大洞A'式直後に南小泉[仙台市1950]・郡山[長島編1992]・山居[岡田編1988]・十三塚[太田1979]が、さらに次段階には原遺跡[大友・福山1997]が位置づけられる。これらには東北南部との関係もみうけられるが、精製土器に関しては宮城県北部とほぼ同様の基準を適用することが可能なことから、とくに分離して扱うことはしない。岩手県域では小田野[1987]によるⅠ期、山形県域では佐藤庄一[1978]による蟹沢Ⅰ段階、佐藤嘉広[1985]による弥生Ⅰ期が、青木畑段階に相当するとみなすことができる。



第11図 東北中部の土器群 (1・8 梁瀬浦 〈角田市教育委員会 1976〉, 2・4・6・7・10 赤生津 〈佐藤編 1990〉, 3・5 巻堀 〈一迫町教育委員会 1977〉, 9 北柳1 〈小林・大泉 1997〉, 11・13・15・17・18 熊穴洞窟 〈小田野編1985〉, 12 にひやく寺 〈安部 1985〉, 14・16・20 谷起島 〈林・小田野編 1977〉, 19・21~25・27~31 青木畑 〈加藤 1982〉, 26 郡山 〈長島編 1992〉)

## (2) 大洞A'式から青木畑式へ

a) 変形工字文の変化 東北中部の大洞A<sub>2</sub>式の変形匹字文は剣吉荒町I群と非常に高い共通性を示しており、同様のことは大洞A'式の変形工字文についてもいえる。ただし、熊穴洞窟(第11図13)のような崩れた多段構成が東北中部の大洞A'式に特徴的にみられ、しかも、上下段で半単位ずれたものが東北北部よりも早く出現している点は注目される。粘土瘤が付される場合、典型的な「変形工字文E」もみられるが、第11図16のように下部の交点には粘土瘤をつけずに工字文風につなげてしまう省略例も東北中部に多い。

大洞A'式直後の変形工字文から、東北北部とは大きくことなった展開をみせる。交点・中点の粘土瘤がない場合も多く、それが付されても砂沢式のようには大型化しない(第11図19)。「変形工字文C」が非常に多くみられ、主線となる一本の細い沈線で描かれた三角形が横位に反転を繰り返し、副線は三角形の底部や斜線にあたる部分にも添えられる(第11図25)。これは大洞A'期からの東北中部の特徴であったが、青木畑期にも明確に受け継がれている。また、主線の内側と外側の両方に副線が添えられる場合も出現するので、一見すると三本一組の沈線が変形工字文を形作っているように見えるものもある。さらに、「入組型」変形工字文の存在が目立つ点も、東北中部の大きな特徴となっている(第11図21・22)。

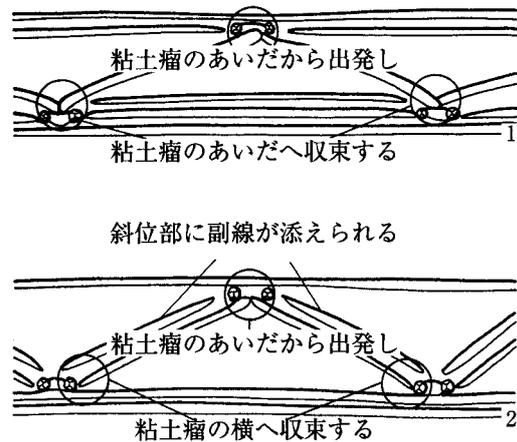
粘土瘤が付いていても、「変形工字文D(完結型)」は非常に少なく、「E(連結型)」が多い。「D」は横位反転が繰り返されるという意味で変形匹字文や「C」・「C'」にもっとも類似するにもかかわらず、これが少なく「E」が多いのはやはり工字文系列の影響が強く残っているからといえよう。

ただし「変形工字文E」の描き方には、東北北部とは若干の違いが生じている(第12図)。主線斜位部分の出発点(頂点)および終着点(交点)に着目したとき、東北北部では粘土瘤間から出発し粘土瘤間で終着または反転上昇するものが多い(第12図1)。これにたいして東北中部では、粘土瘤間から出発して粘土瘤横で終着するもの、あるいは粘土瘤の横から出発して粘土瘤間で反転上昇するものが多い(第12図2)。このような地域性は、大洞A'式における変形工字文の主線・副線の取り違えが生じていたことを示している点で重要である。

b) その他の文様の変化 東北中部では、浅鉢・高坏の文様帯の拡大は東北北部ほど顕著には生じない。ただし、地紋帯の中央付近に沈線が描かれる例は多く、この点に関しては砂沢式との類似性も認められる(第11図25・29)。

口縁内面の沈線は頻繁に描かれるが、高坏などでは突起にそって描かれているものもある。これは平行線が主流となる砂沢式とは対照的な特徴といえる。

粗製の深鉢は、熊穴洞窟・宮沢などと比較してもほとんど変化していない(第11図31)。また、深鉢にも変形工字文が盛んに施される点は、東北北部との大きなちがいがいといえるだろう。



第12図 変形工字文の描き方(1:東北北部型  
2:東北中部型)

c) 器形の変化 浅鉢の器形は、東北北部と同様の変化がみられる。すなわち、口縁部が直立またはやや内屈し胴部が丸みを帯びる大洞A'式にたいして、青木畑式では直線的な器形になる。ただし、砂沢式のように外反気味の器形はない。口の開きも大洞A'式よりは小さくなり、突起は発達せず平縁のものが卓越する(第11図25・29)。

青木畑式で急増する高坏の台部は、大洞A'式から大きな変化はなく開いたままである(第11図19)。突起は非常に発達し、大きなものが4~8単位つけられるようになる。しかし、その形態は扁平あるいは角柱状で、先端がいくつかに分かれる東北北部とは対照的である(第11図19~24)。

深鉢の形態は、口縁部がやや大きくひろく甕にちかい。この形態は東北中部の大洞A'期から連続しているので、粗製深鉢については青木畑期以前から地域性があることがわかる。

### 3 東北南部(第13図)

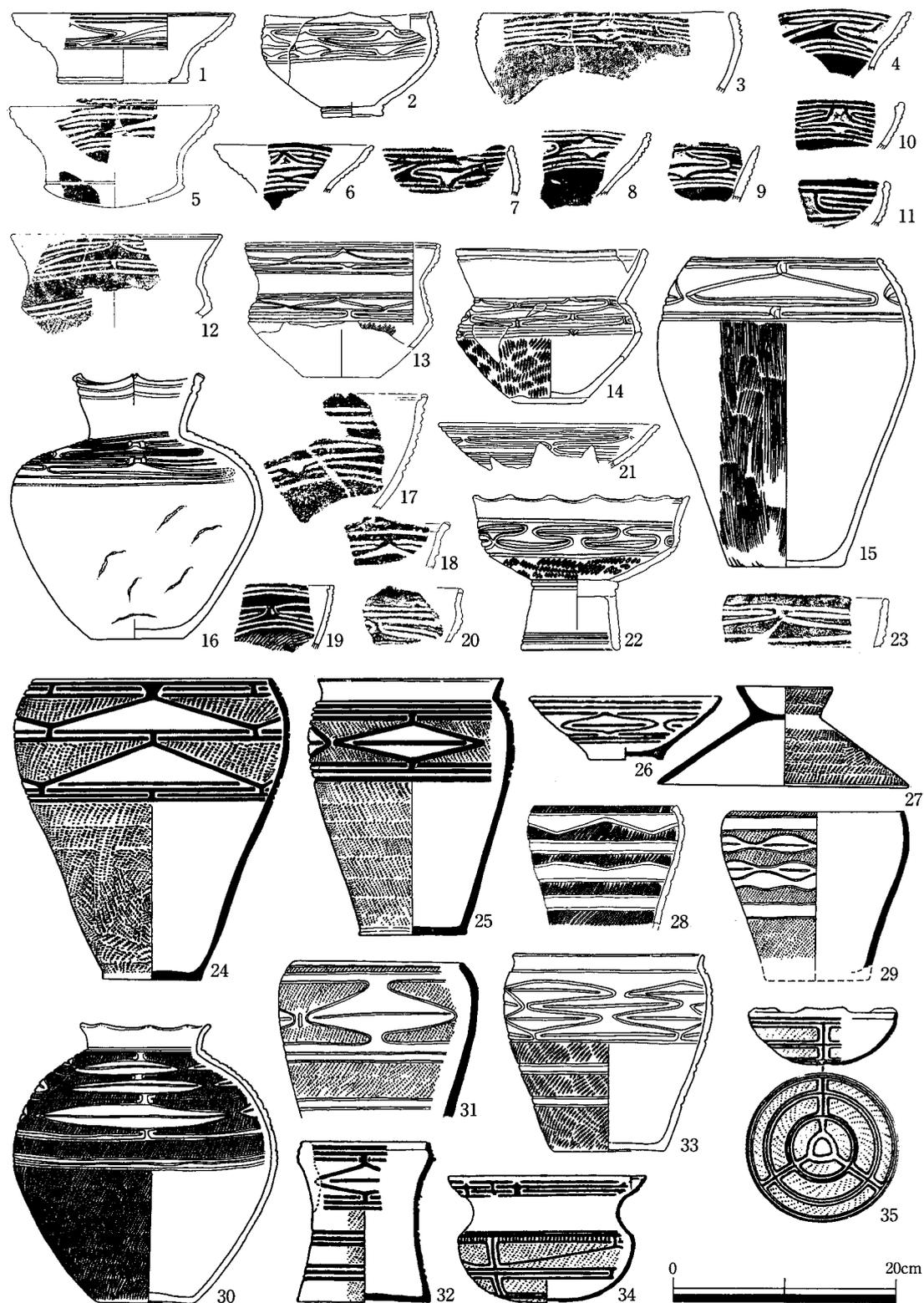
#### (1) 御代田式の内容

東北南部の大洞A<sub>2</sub>式としては福島県羽白C〔鈴鹿ほか 1988〕・根古屋〔梅宮・大竹 1986〕遺跡出土土器などがあげられ、器形のうえでは東北北部との差異は大きい、文様の規格性は非常に高い(第13図1~11)。

本地域の大洞A'式としては、福島県滝ノ口〔高田 1987, 郡山市教育委員会 1988〕・岩下D〔鈴木・松本 1986〕・鳥内〔目黒ほか 1998〕・根古屋〔梅宮・大竹 1986〕・三貫地〔渡辺ほか 1981〕・道平〔渡辺・大竹 1983〕・岩下A〔松本編 1985〕などの出土土器があげられる。福島県域の大洞A'式は、東北北・中部とはやや趣を異にする(第13図12~23)。これは関東地方の三角連鎖文の影響から、極度に簡略化がすすんだとみられる変形工字文が目立つ点に起因している。そのなかにあつて、東北北・中部と直接的な対比を行いうる資料も存在しており(第11図16~23)、本稿ではこれらを東北内部での並行関係をつかむための重要な指針として扱いたい。とくに連続型・完結型(第1図)の変形工字文は、三角連鎖文の影響をつよく受けている連結型とは変化の道筋がことなっていたために、東北中部との類似性が保持される結果になったと思われる(第11図16・19・22)。各地域で在地化しつつある変形工字文を捨象するならば、文様の共通項はこの段階にまで認めることができるのである。

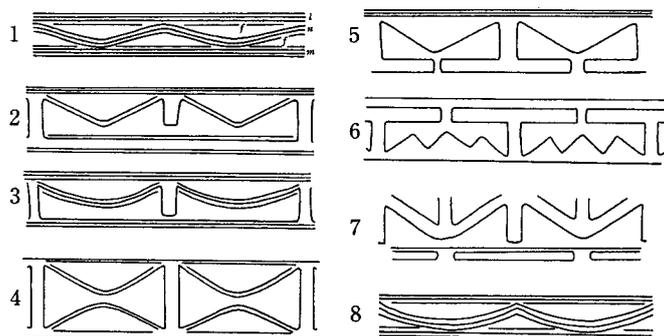
土器組成全体に東北南部の地域色が顕在化してくるのは、やはり大洞A'式のあとからである。大洞A'式直後の土器として、これまで御代田遺跡〔目黒 1962, 馬目 1978〕, 岩尾遺跡〔中村 1982, 1988〕の土器群が考えられてきた。岩尾遺跡について、石川〔1984〕・鈴木〔1987a, 1992〕は大洞A'期に位置づけている。筆者もこの見解を支持し、ここではとくに問題とはしない。

従来の御代田式が、時間的に幅をもっている点は石川〔1984〕・大竹〔1985〕の指摘のとおりである。御代田I群〔大竹 1985〕・一人子〔馬目・古川 1970〕遺跡出土資料の変形工字文は、滝ノ口や岩下Dなどに比してさらに簡略化がすすんでおり、文様帯幅の拡大と複段化(半単位ずれない構成)が顕著にみられる。しかし、両者は非常に連続的であり、おそらく中間に未知の型式を挟むことはできないであろう。御代田と一人子では、一人子のほうが三角形のモチーフを遵守した変形工字文の残りが良好で、やや古く位置づけられる〔馬目 1978〕。ここでは一人子遺跡と御代田I群をあわせて御代田式とし、その古段階に一人子遺跡、新段階に御代田I群を位置づける。



第13図 東南北部の土器群 (1・15・16・30・33鳥内〈目黒ほか 1998〉, 2~4・6~11・22羽白C〈鈴鹿ほか 1988〉, 5・17・18・21岩下A〈松本編 1985〉, 12・13・20・23・28三貫地〈渡辺ほか 1981〉, 14滝ノ口〈高田 1987, 郡山市教育委員会 1988〉, 19岩下D〈鈴鹿・松本 1986〉, 24・25・27一人子〈馬目・古川 1970〉, 26・32・34・35御代田〈目黒 1962〉, 29・31鱸沼〈志間 1971〉)

これらに後続する土器群の状況も瞥見してみよう。御代田式期に出現し、その直後から発達する磨消縄文から、御代田Ⅱ群・孫六橋出土資料と山王Ⅲ層式〔須藤1983〕の大部分の並行関係が導き出せる。東北南部の菱形モチーフをもつ磨消縄文やヒトデ文の祖型となる文様は、山王Ⅲ層式における文様（第14図）そのものか、そ



第14図 山王Ⅲ層式の文様模式図（須藤〈1983〉より）

れを上下反転させたものを上部に継ぎたしてできた文様である。類似した現象は会津地方の西麻生〔中村ほか1980〕・今和泉式〔小滝1960, 大竹・志賀1985, 第15図〕にもみられ、これらは御代田式を基盤としながら中通りとはことなつた脈絡のなかで成立したといふことができるであろう。これらの土器群を山王Ⅲ層式並行に位置づけるとすれば、御代田式の位置づけはやはり大洞A'式直後とするのが妥当である。なお、浜通りでは成田藤堂塚〔杉原1968〕が御代田期に位置づけられると考えられるほかは、該期の遺跡は判然とはしていない。

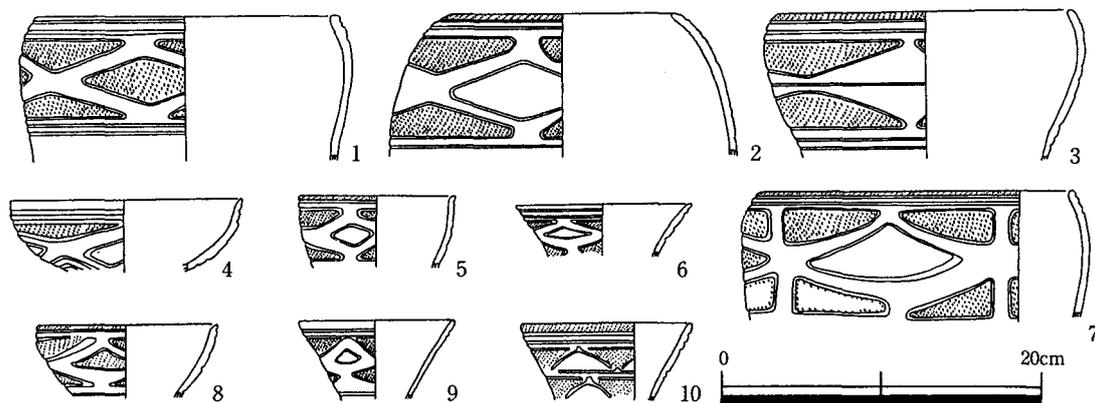
## (2) 大洞A'式から御代田式へ

a) 変形工字文の変化 大洞A'式から御代田式にかけてみられる急速な変形工字文の簡略化は、東北北・中部との対比を難しくしている。粘土粒は用いられることが少ないかわりに交点の主線とひとつつながりの沈線やスリットによって代用される（第13図24・25）。変形工字文の構成は連結型と完結型がみられ、前者の場合は直線的な主線が、後者の場合はやや丸みを帯びるか菱形の主線が描かれるといった対応関係もみてとれる。このほか、菱形の主線の中央に副線が入るなど、すでに東北地方の伝統を脱した要素もみられる（第13図25, 30~32）。磨消縄文は東北地方の中でもっとも多用されており、これはほんらい変形工字文が描かれていた無文部の一部に、地紋が侵入したことによって生じている。

b) その他の文様の変化 御代田式の粗製土器の状況は判然としないが、大洞A'式には条痕や網目状燃糸文をとともなうものが多い。現在の資料から判断するかぎり、御代田期には条痕をもつものは残るが、網目状燃糸文をもつものは急速に衰退あるいは消滅するものとおもわれる。

c) 器形の変化 御代田・一人子および根古屋・鳥内の資料を総合すると、大洞A'式~御代田式にかけて器形のうえで大きな変化が生じていると考えられる。とくに壺形土器は、大洞A'式期までの細頸・いかり肩の器形から短胴化がすすんだことにより、相対的な広口・球胴化が引き起こされる（第13図30）。文様帯はひきつづき肩部に設けられるが、胴部最大径付近にまで拡大する。

量的に卓越する深鉢・鉢では頸部がやや膨らみ、変形工字文が付される場合が多い（第13図24・25・28・29・31・33）。東北中部のように高坏が急増することはないが、小型精製鉢が発達し底面にまで文様が描かれる資料が増加する（第13図34・35）。これらは頸部無文帯を挟んで口縁部と胴部に文様帯をもち頸部がややくびれることから、同様の文様帯構成をもつ縄文晩期後葉の鉢との関連性が窺える（第13図5・13）。



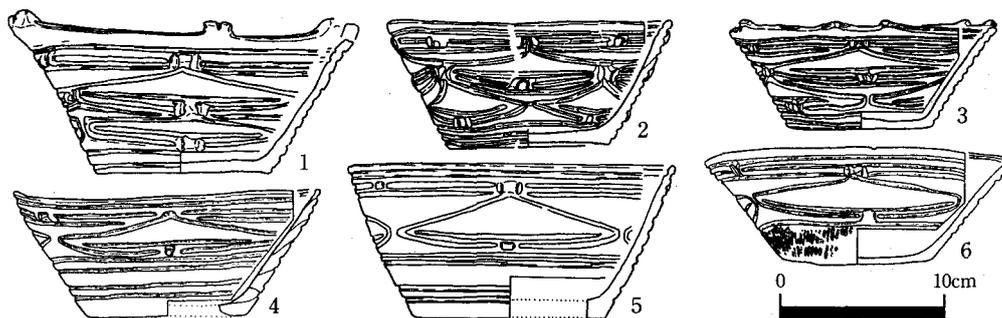
第15図 今和泉遺跡出土土器（大竹・志賀〈1985〉より）

#### 4 大洞A'式の下限と東北内部の並行関係

ここまで東北地方における大洞A<sub>2</sub>式から大洞A'式，さらにそれに後続する土器群を概観してきた。大洞A'式以降の変形工字文は，東南北部でとくに簡略化がすすんでいるものの，そのなかには東北北・中部と共通の俎上へのせることが可能な連続型・完結型も存在していた。また，変形四字文系列・工字文系列の大部分は東北北・中部での共通性が高く，工字文系列に属する「入組型」変形工字文などは東北北部と中部の並行関係の把握に役立てることができる。この意味で，山内[1930]の発言にもみられたように，すくなくとも大洞A'期までの精製土器は，共通項を保有しつつ東北一円に分布しているといえる。だとすれば，「剣吉荒町Ⅱ群段階」までの東北地方の並行関係を認めることが可能で，ここまですべてを大洞A'式としてとらえることができるだろう。すなわち剣吉荒町Ⅱ群—宮沢・熊穴洞窟—岩下A・D段階が大洞A'式に相当するわけである。

東北中・南部の例から判断すれば，青木畑・御代田段階から急速に地域色が顕在化しており，すでに大洞A'式の範疇を逸脱していると考えられる。これに東北北部にほぼ限定される砂沢式の分布を考えあわせるならば，砂沢式が落ち着く場所は大洞A'式直後以外にないであろう。もし砂沢式を大洞A'式の新段階に位置づけるのであれば，この時期に相当する東北中・南部の土器はまったくなくなってしまうか，大洞A'式にみられる東北の型式論的一体性のなかに時間差を認めてしまうことになる。これが現在の問題意識からみた大洞A'式の下限およびその直後のとらえかたの根拠であり，山内が示してきたように「砂沢段階」を大洞A'式のなかにはふくめない理由である。したがって「砂沢段階」は，大洞A'式（「剣吉荒町Ⅱ群段階」）とは独立した型式としてとらえられるべきなのであり，砂沢式—青木畑式—御代田式が大洞A'式直後に位置づけられることになる。この並行関係は，中村[1976]によって早くから指摘されてきたところである。

砂沢式と青木畑式の並行関係をしめす共伴事例として，山形県生石2遺跡の事例をあげておこう（第16図）。生石2遺跡C・E区出土土器は，土器の廃棄ブロック出土と考えられる一括性の高い土器群である。本遺跡の浅鉢を検討すると，砂沢式と青木畑式の特徴をもつものが共存していることがわかる。前者には直線的な器形，多段構成の「変形工字文D，E」（連結型），太い沈線，大きな



第16図 生石2遺跡出土土器 (安部・伊藤 (1987) より)

粘土瘤，幅広の文様帯，大型の突起といった砂沢式の条件がすべてそろっている（第16図1～3）。これにたいして後者には，口がやや大きく開く器形，狭い文様帯，細い沈線，「変形工字文C」（完結型）などの青木畑式<sup>(3)</sup>の要素が組合ってみられる（第16図4～6）。このような砂沢式と青木畑式の浅鉢がひとつの遺跡内で共存している例によって，両者の時間的並行性が確認できるだろう。おなじような現象は砂沢遺跡でもみられ，量的に卓越する砂沢系浅鉢に少量の青木畑系浅鉢が共伴している。

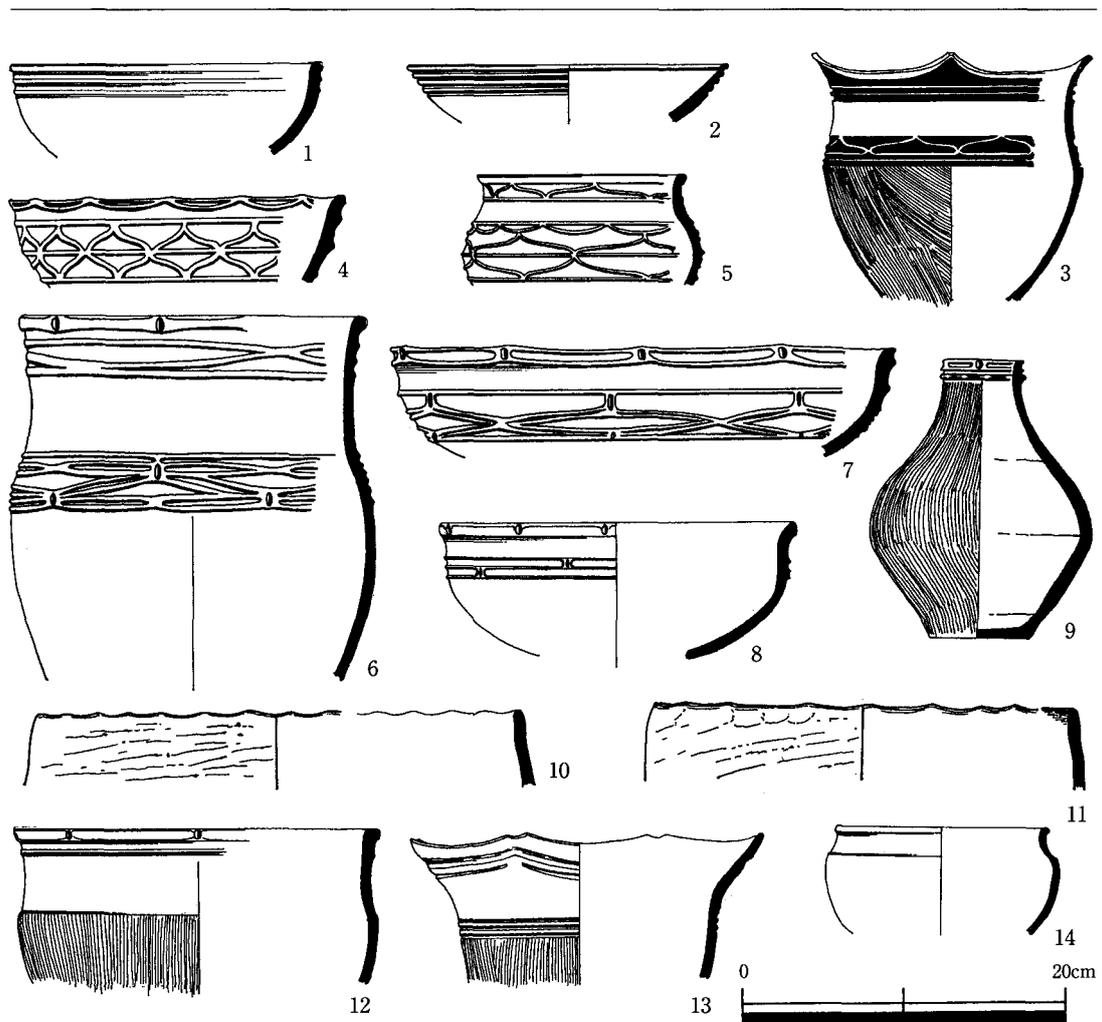
青木畑式と御代田式の並行関係を確認するための良好な共伴例は，いまのところ見いだせない。むしろ東北南部と関東地方の並行関係が考えやすい状況にある。よって，つぎに関東以西の地域へと目を転じ，東北地方とどのような関係にあるのかを考えることにしたい。

## ④……………広域編年への位置づけ

### 1 関東地方との関係

御代田式類似の資料が北関東から北陸に広く分布することは，石川 [1985] によって論じられている。石川 [1985] は，関東地方の甕形土器を分類し，岩櫃山・須和田系A1, A2類に御代田式と区別し得ない変形工字文をもつ資料が含まれていることを指摘している。これらが出土する遺跡は群馬県から埼玉県北部にいたる利根川上流域に集中しており，変形工字文の種類や変遷の歩調に関しても北関東と東北南部は非常に緊密な関係にあることが考えられている。さらに，群馬県上久保遺跡 [工楽 1968] ではA1・A2類甕形土器に，搬入品とおもわれる水神平式および畿内第I様式新段階に対比される遠賀川系土器が伴出しており，これらは御代田式と水神平・畿内第I様式新段階の双方と接点をもつ「鍵」としての役割をもつ土器群として認識できる。

関東東部における千網・荒海式に関しては，長い研究の歴史にもかかわらず，多くの不明な部分が残されている。鈴木 [1985]，鈴木・川井・海老沢 [1991] は，「荒海1式—大洞A<sub>2</sub>式」，「荒海2式 (+3式)—大洞A'式」との並行関係を示しているが，これは荒海式4細分の大洞式との対比としてはごく整合的なものと評価される。しかし，荒海貝塚の荒海式 [西村 1961]・姥山IV [鈴木 1963]・殿内BV [杉原・戸沢・小林 1969] をふくめて荒海式とし，千網式・荒海式・氷I式の一部



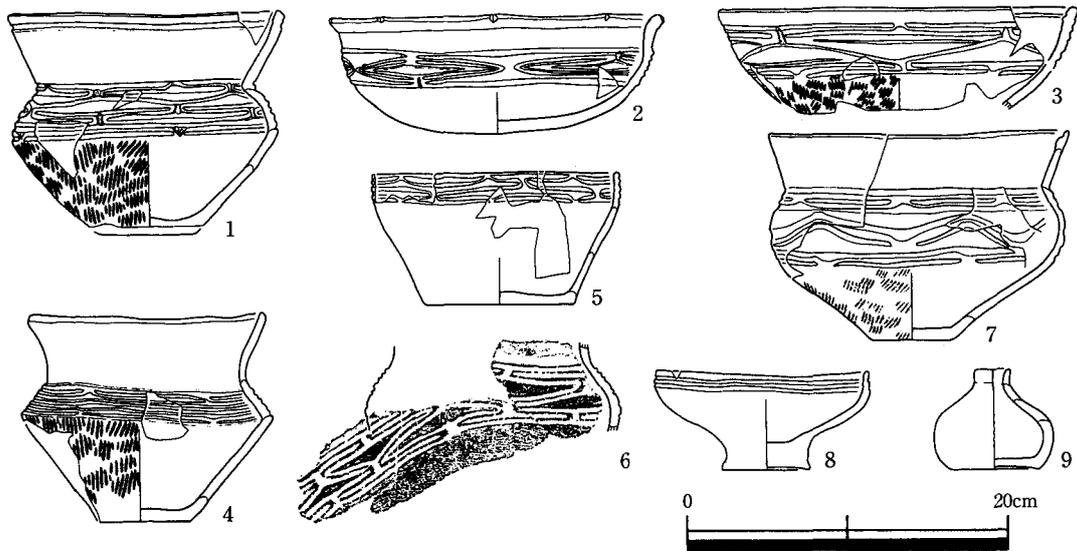
第17図 水遺跡出土土器（永峰〈1969〉より，1-5〈古段階〉，6-9〈中段階〉，10-14〈新段階〉。段階区分は中沢〈1998〉にしたがった）

並行関係を認める見解も提起されているように〔中沢 1991〕，当該期の土器変遷はきわめて複雑な様相を呈している。変形工字文が多用される荒海式の検討は東北地方との系統関係を考えるうえで非常に重要なテーマであることは確かであるが，ここでは結論を保留する。ただし荒海式の一部が大洞A'式，さらには砂沢式に並行するという説の蓋然性は高く，砂沢式をあつかううえでもいずれは触れなければならない問題となるであろう。

南関東に関しては「ポスト浮線文土器」〔谷口 1996〕の理解が重要である。とくに水Ⅱ式〔永峰 1969〕については型式設定の妥当性や水Ⅰ式との時間的關係が依然として明確にはなっておらず，関東東部と同様の理由からここではくわしい言及をさけておく。

## 2 信州・北陸地方との関係

長野県荒神沢〔気賀沢・小原 1979〕・御社宮司〔小林編 1982〕・トチガ原〔大町市教育委員会 1980〕遺跡の事例から，中部高地では浮線文土器群のもっとも新しい段階に位置づけられる水Ⅰ式

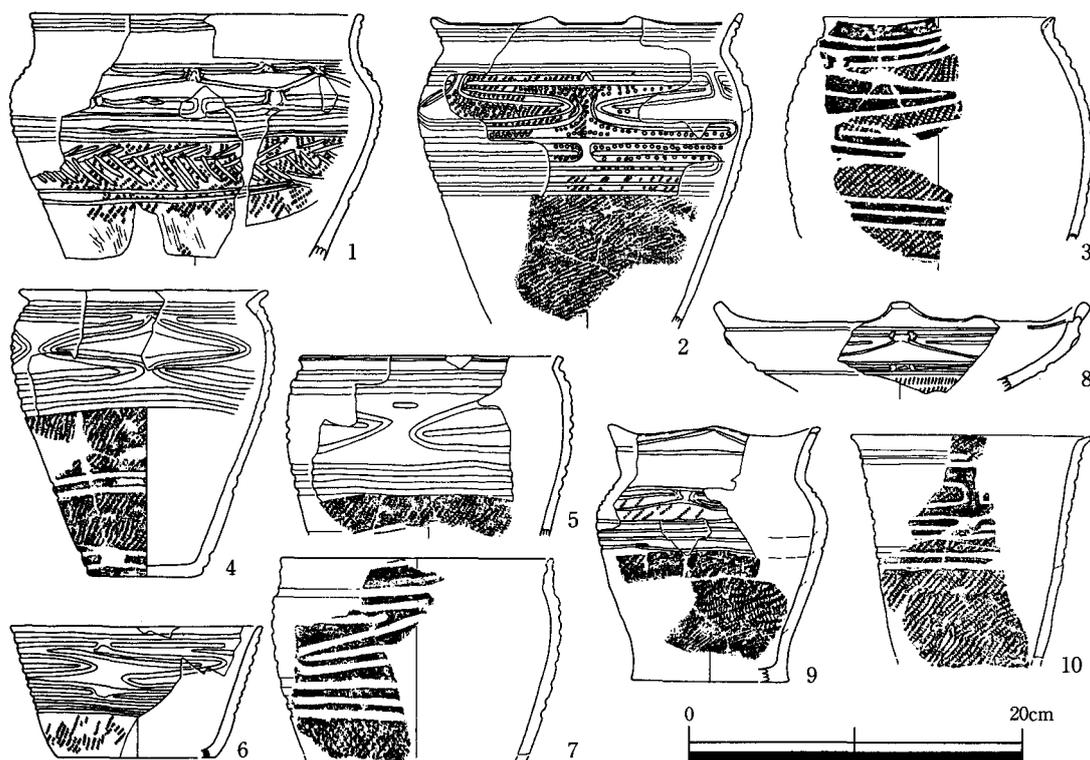


第18図 滝ノ口遺跡1号住居跡出土資料（高田〈1987〉より）

（第17図）と東海地方の初期条痕文土器である樫王式〔紅村ほか 1961〕の相伴関係が見いだせる。しかし、この段階と御代田式の接点は明確には確認することができない。氷I式の設定当初においては大洞A<sub>1</sub>式に並行すると考えられたが〔永峰 1969〕、福島県滝ノ口遺跡〔高田 1987、郡山市教育委員会 1988〕において大洞A'式とも相伴することがあきらかになった（第18図）。第18図1・2・8・9が、SI01（1号住居跡）検出面において「折り重なるように」出土したからである〔高田 1987, p. 140〕。

設楽〔1991a〕は滝ノ口の浮線文浅鉢（第18図2）を、浮線文の会合点があはなれ規範から外れてはいるものの、典型的な氷I式に対比しようと考えている。いっぽう田部井〔1992〕は、口外帯の退化と浮線のとぎれの存在からより新しい段階に位置づけている。ここでは、口外帯の状況とやや外反した口縁部の器形、直線的な浮線文のモチーフが氷I式中段階〔中沢 1998〕に比定しうることから設楽〔1991a〕の見解を支持したい。いっぽう第18図1の鉢には、関東地方の三角連鎖文の影響をつよくうけた変形工字文がみられる。設楽〔1991a〕は、これを女方34号竪穴〔田中 1944〕直前の大洞A'式古段階の所産とみている。設楽のいう大洞A'式古段階の一部には大洞A<sub>2</sub>式もふくまれると思われるが、女方34号竪穴例と滝ノ口例のあいだにはそれほど大きな型式論的差異が認められない。同様の器形であるが抉りこみによる文様描出がみられる西方前第94号土坑出土土器〔仲田編 1987, p. 128〕はこれらと同時期かやや古いと考えられるが、これにも大洞A'式と考えられる資料がともなっている点を勘案すれば、女方34号竪穴例と滝ノ口例の両者はここでの大洞A'式の範囲におさまるものと考えられる。典型的な氷I式と大洞A'式の相伴例ではないことで滝ノ口例の解釈は微妙な問題をふくんでいるが、氷I式中・新段階と大洞A'式の並行関係は認めざるを得ないだろう。

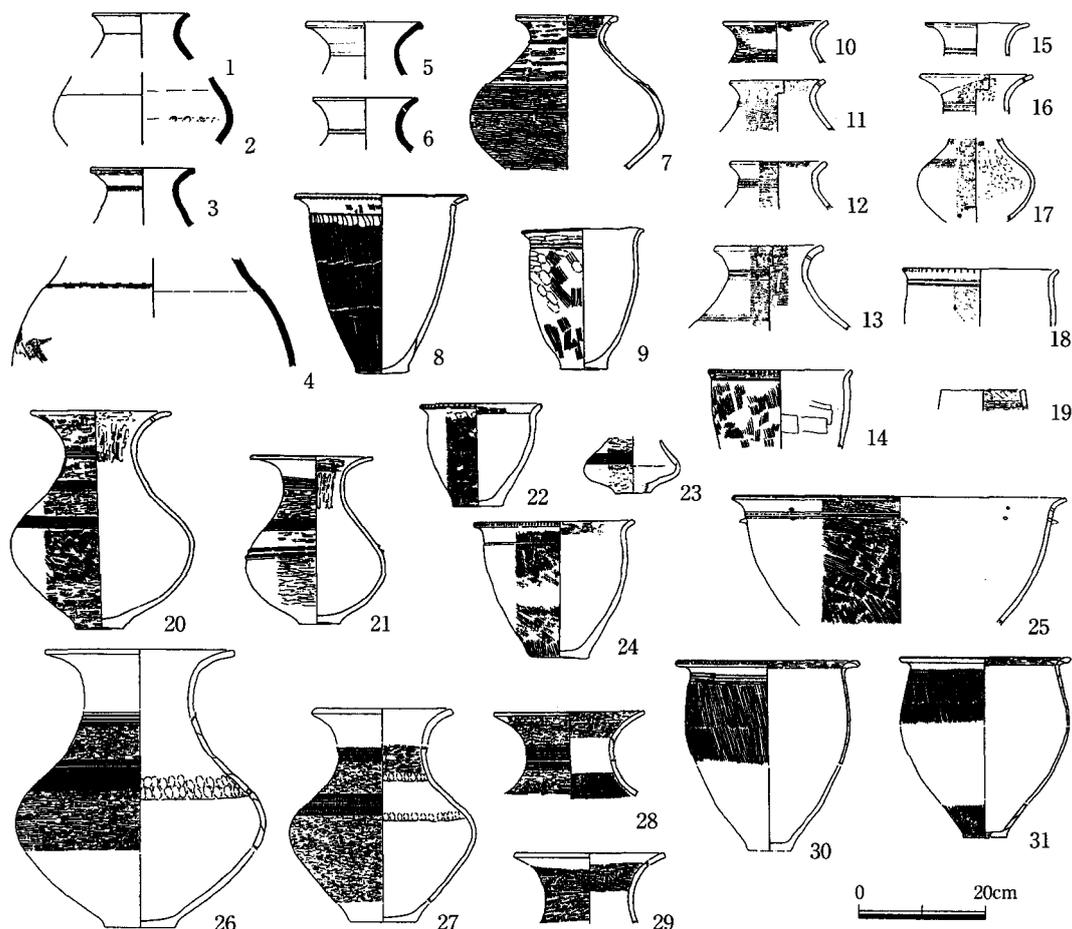
北越の浮線文土器である鳥屋式〔磯崎 1957〕についても、その終末をより新しくする修正がおこなわれている。石川〔1993〕は六野瀬遺跡〔石川・増子・渡辺 1992〕出土の一括資料の検討から、



第19図 緒立遺跡B地区出土土器（渡邊〈1998〉より）

鳥屋2b式が大洞A<sub>2</sub>式、さらには少なくとも大洞A'式の一部と並行することを指摘した。鳥屋2b式の終末が氷I式の終末と同じと仮定するならば、ここでいう大洞A'式との並行関係は認められてよいであろう。これらと大洞A'式の終末が一致するかどうかについては検討の余地が残されているが、浮線文土器群分布圏で大洞A'式新相のみの組成がみられないことを考えれば、編年表のうえでは浮線文土器の終末を大洞A'式の終末に同期させておくのが現時点でのもっとも順当な方策であろう。鳥屋2b式を大洞A<sub>2</sub>・A'式並行と考えれば、砂沢式並行期には緒立式がくることになる（第19図）。緒立式は御代田式ときわめて類似した内容をもっていることから、両者が並行関係にあることはほぼ疑いなく、この段階が大洞A'式直後に位置づけられることになる。

北陸西部の縄文晩期終末期の土器群として、下野式〔吉岡 1971〕とそれよりやや新しい特徴を有する長竹式〔中島 1977〕が認識されてきた。長竹式は、新しく見積もっても大洞A<sub>1</sub>式並行と考えられ、その後の変遷は本地域の初期弥生土器である柴山出村式の細分にゆだねられることとなる。橋本〔1982〕による柴山出村式の2細分のうち新しい部分は、いわゆる「大地式」〔吉田 1951, 大参 1955〕に類する工字状沈線・点列、さらには羽状条痕を有する土器を含んでおり、こうした特徴を重視するならばこれらは弥生前期末～弥生中期にまでさがる土器群ということになる〔湯尻 1983〕。柴山出村I式と長竹式とのヒアタスは依然として大きい。柴山出村II式を水神平式並行～中期初頭に位置づけるとすれば、これよりも古い柴山出村I式は大洞A<sub>2</sub>・A'式に並行する可能性が高いであろう。



第20図 東海地方遠賀川式（石黒〔1992〕より作成，1～6朝日貝殻山（柴垣ほか 1972），7～9白石（贊 1991），10～14月繩手（松田ほか 1990），15～19元屋敷（澄田ほか 1967），20～25高蔵SD03（重松 1987），26～31山中（服部編 1992），1-4（I-1期），5-9（I-2期古），10-19（I-2期新），20-25（I-3期），26-31（I-4期））

### 3 東海地方との関係

東海地方西部の遠賀川式は、畿内第I様式中段階並行とされる「貝殻山式」および中段階の一部と新段階並行とされる「西志賀式」に区分されている〔萩村 1956〕。しかし、基準資料が明示されないことで、あらたな資料の評価が実態不明の「貝殻山式」・「西志賀式」にとられるという弊害を生んできた。

こうした問題意識のもと、石黒〔1992〕は近年増加しつつある遺構出土の一括性が高いと考えられる資料を用いた編年試案をしめしている（第20図）。この結果、東海西部の前期弥生土器はI-1からI-4期に細分され、さらにI-2期は古・中・新の3段階に、I-3期は古・新の2段階に段階区分された。

これにより、従来判然としなかった貝殻山式と西志賀式のあいだの変遷過程がスムーズに把握できることになり、現状ではもっとも説得力に富む編年案であると評価される。ただし各期の段階区

分については、とくにI-2期(新)とI-3期(古)の区分の根拠が弱く、I-3期古段階をI-2期新段階のなかに含めて理解したほうが整理がつく。畿内との並行関係を掘む際に生じる支障をさけるため、本稿ではI-3期の段階区分は採用しないこととする。

さらに石黒[1992]は、尾張地方と三河地方東部以東における条痕文土器の変遷がことなる点を明示したうえで、遠賀川式との対応関係に言及している。それによればI-2期には条痕文深鉢の口縁部外反化による甕形土器への移行が生じるが、体部は横位条痕を有している。尾張ではI-3期になってから口唇部押引と羽状条痕をもつものが出現する。I-3期の条痕文は口縁部の外反の度合いが弱く、短頸である点で樗王的な特徴をのこしている。しかし、羽状条痕を有する甕がともなうことで、樗王式の段階をすでに脱していると考えなければならないという。したがって、I-2期までが樗王式に、I-3・4期が水神平式期に並行する可能性が考えられる。樗王式と氷I式の並行関係は、愛知県樗王[紅村ほか1961]・西浦[大参1972]・古沢町[吉田・和田1971]・伊川津[渥美町教育委員会1972]、静岡県山王[稲垣ほか1975]において確認されている。ゆえにI-1・2期の遠賀川式および樗王・氷I式は非常に強固な横の関係としてとらえなければならないことは間違いない。したがって、大洞A'式の位置づけもこの段階とするのが妥当であり、砂沢式はつぎの水神平式並行に落ち着くこととなる。

#### 4 近畿地方との関係

近畿では、佐原[1967]による畿内第I様式の3段階区分とは、若干ことなった見解も提出されている[井藤1981, 寺沢・森岡編1989・1990, 田畑1997]。これらの見解は厳密には佐原の分類とは異質であるが、本稿で関係する中段階と新段階の区分については佐原の見解との大まかな対比が可能であることから、ここでは基本的には佐原の区分を用いて記述をすすめる。

従来から指摘されてきたように、愛知県朝日遺跡貝殻山地点出土資料のうち、頸部に段をもち短い口縁部を有するものは、東海西部でもっとも古い遠賀川式である(石黒編年I-1期)。しかし数少ない断片的な資料のため畿内との対比は難しく、たとえば田畑[1997]が提起するような古段階と中段階を区分する判断基準となる段をもつ資料の割合や、削出突帯Ⅱ種や蓋形土器の有無などを検討することができない。筆者はこれらが、すくなくとも中段階の古い部分に位置づけられる可能性を考えてもよいという立場をとるが、古段階にまでさかのぼることは考えにくい。現状では、東海西部I-1期～I-2期(先述の通りI-3期古段階をふくむ)を畿内第I様式中段階に比定し、I-3・4期は「く」字状に曲がる口縁部がなくなり、多条化した沈線と貼付突帯を有するもののみによって構成されることから、畿内第I様式新段階並行と考えておくのが妥当であろう。

ここまでの検討から明らかになった並行関係は、ひとつは畿内第I様式中段階・東海西部I-1・2期遠賀川式・樗王式・氷I式・鳥屋2b式・(荒海2・3式)・大洞A'式であり、いまひとつは畿内第I様式新段階・東海西部I-3・4期遠賀川式・水神平式・(氷Ⅱ式)・沖式・緒立式・御代田式・青木畑式・砂沢式という段階である。

第1表 編年表

近畿	東海	北陸西部	信州	北関東	北陸東部	東西南部	東北中部	東北部
大開・長原	馬見塚	長竹	離山	千網 (如来堂)	鳥屋2a	大洞A <sub>1</sub> (新)		
I(中)	I-1・2 樫王	柴山出村 I	氷 I(古)		鳥屋2b	大洞A <sub>2</sub>		
			氷 I(中・新)	大洞A'				
I(新)	I-3・4 水神平	柴山出村 II	氷 II	沖	緒立・御代田	御代田	青木畑	砂沢
II	II-1 岩滑	(矢木ジワリ)	(+)	(前組)	(二又)	今和泉・西麻生	山王Ⅲ層	五所・二枚橋

## おわりに

以上の検討の結果、縄文時代晩期終末～初期弥生土器の広域編年は、第1表のようにまとめることができる。変形工字文の成立プロセスの委細、各型式の詳細な段階区分と地域間の対比についてはさらに検討を重ねてゆく必要がある。しかし、蓋然性の高い部分をつなぎ合わせることによって、編年のもっとも基礎となる骨格をつくり、近畿地方と対比することができたという意味で当初の目的は達成された。砂沢式と畿内の対比にかぎっていえば、ここでの結論は中沢・丑野 [1998] のしめす編年観にきわめて近いものといえる。

ここで、東北地方初期弥生土器のもうひとつの構成要素である「遠賀川系土器」との関係が、解明すべき問題としてあらためて浮き彫りになる。佐原 [1987a] が指摘するように、東北の「遠賀川系土器」は畿内第I様式中段階の特徴を兼ね備えているが、その多くが砂沢式に伴っているとすれば、ここでの成果とは齟齬が生じることになるからである。これは、西日本からの影響が一時的なものであった [設楽 1991b: 44, 林 1993: 73], あるいは鈴木 [1987b] のいう「東北遠賀川」独自の「流れ」が形成されていたと結論づけることで解決されるかもしれない。しかし、われわれはこのあたりの事情について、どれだけ具体的な説明をもちあわせているだろうか。遠賀川系要素がどのような経緯で流入し、定着したかという問題に関しては、いまだ検討の余地が残されているのである。東北地方初期弥生土器の構成要素としての「遠賀川系土器」の存在が確固たるものとなってきている以上、これを総体として理解するためには在地系土器に目を向けるだけでは不十分なのである。ここでの成果をふまえ、今後は外来要素の成立プロセスと、在地系要素とのあいだに引きおこされた関係にも注目してゆきたい。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、設楽博己先生（国立歴史民俗博物館）、林 謙作先生・小杉 康先生（北海道大学）からは懇切なご指導をいただいたうえ、資料見学などに際しても便宜をはかっていただいた。さらに下記の方々・諸機関からも多大なご協力をいただき、有益なご教示も賜った。記して感謝の意を表する次第である（五十音順、敬称略）。

相沢清利、安部 実、荒川隆史、石川日出志、石黒立人、石郷岡誠一、岩淵宏子、上野秀一、太田昭夫、小笠原善範、小野 忍、加藤邦雄、加藤 学、鎌田 勉、神原雄一郎、日下和寿、工藤竹久、斎野裕彦、佐々木洋治、佐藤由紀男、佐藤義之、沢田 敦、重松和男、菅原俊行、須藤 隆、

諏訪 元, 仙庭伸久, 田中耕作, 谷口 肇, 田畑直彦, 土本典生, 中沢道彦, 中村 裕, 成田滋彦, 成田誠治, 西秋良宏, 野口哲也, 原田 幹, 平野敏彦, 福田正宏, 女鹿潤哉, 山口 巖。

愛知県埋蔵文化財センター, 青森県埋蔵文化財センター, 青森県立郷土館, 秋田市教育委員会, 一宮市立博物館, 岩手県立博物館, 貝殻山貝塚資料館, 酒田市教育委員会, 新発田市教育委員会, 仙台市教育委員会, 多賀城市埋蔵文化財調査センター, 東京大学総合博物館, 南山大学人類学博物館, 新潟県埋蔵文化財センター, 八戸市博物館, 弘前市教育委員会, 明治大学考古学研究室, 山形県埋蔵文化財センター。

## 註

(1)——鈴木 [1987a] は、「手法B」の沈線化を促した要因として補助単位文の消失による三角文の扁平長大をあげている。しかし、変形四角文の沈線化が生じた後にも補助単位文が残存している例が牧野Ⅱで多数みられることから、補助単位文の有無にかかわらず全体の平行線化がもっとも重要な原因であったと考えておくべきであろう。また、田部井 [1992] のいう「大洞A'式古段階」は、「手法A」および「手法B」が明確に存在していることから、大洞A<sub>2</sub>式にふくめて考えるべきである。

(2)——福田 [1997] は二枚橋式と砂沢ⅢB群の波状工字文が入組文と系譜関係にあることを論じながらも、両者のあいだに大きな違いがみられることを指摘した。そこで二枚橋式よりも古い剣吉荒町Ⅱ群土器が砂沢Ⅲb群

と並行し、これにともない二枚橋式と砂沢式の一部が並行すると考えている。そこでは剣吉荒町Ⅱ群を大洞A'式(古段階)とする工藤 [1987] の主張がみとめられているので、砂沢式・二枚橋式はともに一部が大洞A'式期新段階に入ることになる。しかし筆者は、剣吉荒町Ⅱ群と二枚橋式のあいだにはいまだ大きな間隙があり、二枚橋式と砂沢式はやはり並行関係にはならないと考えている。二枚橋式古段階 [高瀬 1998] にみられる発達した口縁部文様帯・頸部無文帯・波状工字文は砂沢式の特徴よりもあきらかに新しく、また定型化した結節沈線文の祖形も剣吉荒町Ⅱ群のなかには見いだすことはできないからである。

(3)——このような組成をもつ土器群に対し、安部・伊藤 [1987] は「生石2式」を設定している。

## 引用文献 (五十音順)

- 渥美町教育委員会 1972『伊川津貝塚』  
 安部 実 1985『にひやく寺遺跡発掘調査報告書』日本道路公団仙台建設局・山形県教育委員会  
 安部 実・伊藤邦弘 1987『生石2遺跡発掘調査報告書(3)』山形県・山形県教育委員会  
 安部 実・月山隆弘 1988『げんだい遺跡発掘調査報告書』山形県・山形県教育委員会  
 飯塚博和 1989「亀ヶ岡式精製土器の文様帯を示す模型図」覚書『土曜考古』13, 85-93頁  
 石川日出志 1984「岩尾遺跡出土資料の編年的位置と特色」『史館』16, 71-84頁  
 —— 1985「関東地方初期弥生土器の一系譜」『論集日本原史』479-506頁  
 —— 1993「鳥屋2b式土器再考—六野瀬遺跡出土資料を中心に—」『古代』95, 208-225頁  
 石川日出志・増子正三・渡辺裕之編 1992『六野瀬遺跡1990年調査報告書 立川プラインド工業株式会社東日本工場建設に伴う新潟県北蒲原郡安田町六野瀬遺跡発掘調査報告書』安田町教育委員会  
 石黒立人 1992「遠賀川系土器, 条痕紋系土器」服部信博編『山中遺跡』92-97頁, 100-104頁, 愛知県埋蔵文化財センター  
 磯崎正彦 1957「新潟県鳥屋の晩期縄文式土器(予察)」『石器時代』4, 22-35頁  
 —— 1964「晩期の土器」山内清男編『日本原始美術』1, 170-173頁, 講談社  
 —— 1975「工字文土器論序説」『大阪学院大学人文自然論叢』1, 49-62頁  
 磯崎正彦・上原甲子郎 1969「亀ヶ岡式文化の外殻圏における終末期の土器型式—新潟県・緒立遺跡出土の土器をめぐって—」『石器時代』9, 55-86頁  
 一迫町教育委員会 1977『巻堀遺跡』一迫町教育委員会  
 伊東信雄・須藤 隆 1985『山王岡遺跡発掘調査図録』一迫町教育委員会

- 
- 伊藤博幸・佐久間賢・西野 修編 1982『杉の堂—第4次発掘調査概報—』水沢市教育委員会  
井藤暁子 1981「弥生土器—近畿1—」『考古学ジャーナル』195, 8-14頁  
稲垣甲子男・笹津海祥・望月薫弘 1975『駿河山王 静岡県富士川町山王遺跡群調査報告書』富士川町教育委員会  
宇部則保 1980『是川中居・堀田遺跡発掘調査報告書』八戸市教育委員会  
梅宮 茂・大竹憲治 1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山根古屋遺跡発掘調査団  
江坂輝弥 1961「岩手県大船渡町下船渡貝塚」『日本考古学協会年報』14, 86-87頁  
太田昭夫 1979「宮城県名取市十三塚遺跡出土の弥生土器」『初』1, 10-19頁  
大竹憲治 1985「御代田式土器の再検討」『物質文化』44, 1-20頁  
大竹憲治・志賀敏行 1985「東北部における初期弥生式磨消縄文系土器群の研究—今和泉遺跡出土土器の再吟味—」『福島考古』24, 45-60頁  
大友 透・福山宗志 1997『原遺跡—県道名取村田線改良工事関係発掘調査報告書—』名取市教育委員会・宮城県仙台土木事務所  
大町市教育委員会 1980『借馬遺跡（付トチガ原遺跡立ち合い調査報告）』  
大参義一 1955「愛知県大地遺跡—尾張における初期弥生式文化の一様相—」『古代学研究』11, 1-8頁  
——— 1972「縄文式土器から弥生式土器へ—東海地方西部の場合—」『名古屋大学文学部研究論集』56  
岡田康博編 1988『東北地方の弥生式土器の編年について』縄文文化検討会  
小田野哲憲 1987「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』5, 1-22頁  
小田野哲憲編 1985『岩手県東山町熊穴洞窟発掘調査報告書』岩手県立博物館  
加藤道男 1982『青木畑遺跡』宮城県教育委員会  
加藤 稔 1965「山形県東根市蟹沢遺跡」『日本考古学協会年報』13, 96頁  
——— 1978「山形の弥生式土器」『北奥古代文化』10, 9-33頁  
気賀沢進・小原晃一 1979『荒神沢遺跡—緊急発掘報告書—』南信土地改良事務所・駒ヶ根市教育委員会  
木村鐵次郎・水谷和憲・三林健一 1997『畑内遺跡Ⅳ』青森県教育委員会  
工藤竹久 1987「東北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』72-4, 39-68頁  
工藤竹久・高島芳弘 1986「是川中居遺跡出土の縄文時代晩期終末期から弥生時代の土器」『八戸市博物館研究紀要』2, 1-31頁  
工楽善通 1968「北関東地方Ⅰ」小林行雄・杉原莊介編『弥生土器集成本編』117-121頁  
紅村 弘 1956「愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文土器との関係—土器形式の分類とその編年—」『古代学研究』13, 1-9頁  
紅村 弘・伊藤秋男・金子浩昌・中村文哉ほか 1961『篠東—篠東第二次掘王・行明調査報告—』小坂井町教育委員会  
郡山市教育委員会 1988『滝ノ口遺跡 中山地区土地改良共同施工事業関連発掘調査報告書2』  
小滝利意 1960『今和泉』会津史談会考古学研究会  
児玉 準 1983『平鹿遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会  
後藤勝彦 1972『宮城県七ヶ浜町二月田貝塚（Ⅱ）』宮城県塩釜女子高等学校  
小林圭一・大泉壽太郎 1997『北柳1・2遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター  
小林秀夫編 1982『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市 その5—昭和52・53年度』日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会  
小林正史 1988「新潟県山北町上山遺跡出土の縄文時代終末期の土器群」『北越考古学』1, 35-45頁  
斉藤吉弘・高橋守克・真山 悟 1980「宮沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』3-261頁, 宮城県教育委員会・日本道路公団  
佐藤好一編 1990『赤生津遺跡—赤生津遺跡発掘調査報告書—』仙台市教育委員会  
佐藤庄一 1978「山形県における縄文時代最末期の土器様相」『山形考古』2-3, 40-56頁  
——— 1980「山形県にみる亀ヶ岡文化の特質と変容」『考古風土記』5, 126-143頁  
佐藤禎宏・佐藤鎮雄 1972『神矢田遺跡—第3次・第4次・第5次発掘調査報告と考察—』遊佐町教育委員会  
佐藤嘉広 1985「最上川流域における弥生文化の成立」『北奥古代文化』16, 33-60頁  
——— 1991「岩手県地域の概要」『東日本における稲作の受容』第Ⅱ分冊東北・関東地方, 8-65頁, 東日本埋蔵文化財研究会  
佐原 真 1967「山城における弥生文化の成立—畿内第Ⅰ様式の細分と雲ノ宮遺跡の占める位置—」『史林』50-5, 103-127頁  
——— 1987「みちのくの遠賀川」岡崎敬先生退官記念事業会「東アジアの考古と歴史」中, 265-291頁  
志賀敏行 1986「出土遺物」梅宮茂・大竹憲治編『霊山根古屋遺跡の研究』霊山根古屋遺跡発掘調査団
-

- 重松和男 1987『高蔵遺跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
- 設楽博己 1982「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』134-4, 87-129頁
- 1991a「最古の壺棺再葬墓—根古屋遺跡の再検討—」『国立歴史民俗博物館研究報告』36, 195-238頁
- 1991b「関東地方の遠賀川系土器」『児島隆人先生喜寿記念論集 古文化論叢』18-48頁
- 柴垣勇夫・伊東 稔・末岡熙章・井上光夫 1972『貝殻山貝塚調査報告』愛知県教育委員会
- 志間泰治 1971『鱸沼遺跡』東北電力株式会社
- 白鳥文雄・下山信昭・山内 実・野村信生 1997『宇田野(2)遺跡・宇田野(3)遺跡・草薙(3)遺跡』青森県教育委員会
- 菅原俊行編 1984『秋田市秋田新都市開発開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 坂ノ上E遺跡 湯ノ沢A遺跡 湯ノ沢C遺跡 湯ノ沢E遺跡 湯ノ沢F遺跡 湯ノ沢H遺跡 野形遺跡』秋田市教育委員会
- 1986『秋田市秋田新都市開発開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 地藏田B遺跡 台A遺跡 湯ノ沢I遺跡 湯ノ沢F遺跡』秋田市教育委員会
- 杉原荘介 1968「福島県成田における小堅穴と出土土器」『考古学集刊』4-2, 19-28頁
- 杉原荘介・戸沢充則・小林三郎 1969「茨城県・殿内(浮島)における縄文・弥生両時代の遺跡」『考古学集刊』4-3, 33-71頁
- 鈴木良一・松本 茂 1986「第2編 岩下D遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅶ』7-171頁, 福島県教育委員会・福島県文化センター
- 鈴木良一・山内幹夫・松本 茂・吹野富美夫 1988『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅷ 羽白C遺跡(第1次)』福島県教育委員会・福島県文化センター
- 鈴木克彦編 1988『名川町剣吉荒町遺跡(第2地区)発掘調査報告書』青森県立郷土館
- 鈴木公雄 1963「千葉県山武郡横芝町山武姥山貝塚の晩期縄文土器」『史学』36-1, 67-94頁
- 鈴木正博 1985「『荒海式』生成論序説」『古代探叢』II, 83-135頁
- 1987a「統大洞A<sub>2</sub>式考」『古代』84, 110-133頁
- 1987b「『流れ』流れて北奥「遠賀川系土器」『利根川』8, 12-18頁
- 1992「隠蔽された荒海式」『婆良岐考古』14, 40-87頁
- 鈴木正博・川井正一・海老沢稔 1991「茨城県の概要」『東日本における稲作の受容』第Ⅱ分冊東北・関東地方, 195-220頁, 東日本埋蔵文化財研究会
- 須藤 隆 1970「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』56-2, 10-65頁
- 1983「東北地方の初期弥生土器—山王Ⅲ層式—」『考古学雑誌』68-3, 1-53頁
- 1997「東北地方における弥生文化成立過程の研究」『歴史』89, 44-82頁
- 1998『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究』纂修堂
- 澄田正一・大参義一・岩野見司 1967『新編一宮市史 資料編二』
- 芹沢長介 1960『石器時代の日本』築地書館
- 仙台市 1950『仙台市史』3 別編1
- 高瀬克範 1998「恵山式土器群の成立・拡散とその背景」『北海道考古学』34, 21-40頁
- 高田 勝 1987「郡山市熱海町滝ノ口遺跡1号住居跡出土の土器」仲田茂司編『西方前遺跡Ⅱ土製品・石製品篇』140-144頁, 建設省三春ダム工事事務所・三春町教育委員会
- 高橋龍三郎 1993「大洞C<sub>2</sub>式土器細分のための諸課題」『先史考古学研究』4, 83-151頁
- 滝沢幸長・工藤竹久 1984『剣吉荒町遺跡発掘調査報告書』名川町教育委員会
- 田鎖壽夫 1995『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書—第2次~第5次調査—』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 田中國男 1944(1972再版)『弥生式縄文式接触文化の研究』
- 谷口 肇 1996「ポスト浮線紋—神奈川周辺の状況—(その1)」『神奈川考古』32, 153-166頁
- 田畑直彦 1997「畿内第Ⅰ様式古・中段階の再検討」『立命館大学考古学論集Ⅰ』79-99頁
- 田部井功 1992「大洞A<sub>2</sub>式に関する覚書」『古代』95, 89-113頁
- 角田市教育委員会 1976『梁瀬浦遺跡』角田市教育委員会
- 寺沢 薫・森岡秀人編 1989『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社
- 1990『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社
- 利部 修・和泉昭一 1990『諏訪台C遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会
- 仲田茂司編 1987『西方前遺跡Ⅱ土製品・石製品篇』建設省三春ダム工事事務所・三春町教育委員会
- 中沢道彦 1991「水式土器をめぐる研究史(-)」『信濃』43-5, 439-457頁
- 1998「縄文文化の終焉」『御代田町誌歴史編上』158-192頁
- 中沢道彦・丑野 毅 1998「レプリカ法による縄文時代晩期土器の粉状圧痕の観察」『縄文時代』9, 1-28頁

- 
- 長島栄一編 1992『郡山遺跡—第65次発掘調査報告書—』仙台市教育委員会  
中島俊一 1977『松任市長竹遺跡発掘調査報告 県道松任—矢作道路改良工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書』石川県教育委員会  
中村五郎 1976「東北地方南部の弥生式土器編年」東北考古学会編『東北考古学の諸問題』205-248頁  
—— 1982『畿内第Ⅰ様式に並行する東日本の土器』  
—— 1988『弥生文化の曙光』未來社  
—— 1990「第Ⅴ章人工遺物 第1節土器」『荒屋敷遺跡Ⅱ』181-502頁, 福島県会津若松建設事務所・三島町教育委員会  
中村五郎・新井田忠誠・生江芳徳・本田 昇・芳賀英一 1980「北会津村西麻生遺跡A地点出土の弥生式土器」『福島県考古学年報』9, 43-64頁  
永峰光一 1969「水遺跡の調査とその研究」『石器時代』9, 1-54頁  
賛 元洋 1991「愛知県(三河)白石遺跡」『東日本における稲作の受容—第Ⅲ分冊甲信越・北陸・東海地方—』414頁, 東日本埋蔵文化財研究会  
西村正衛 1961「千葉県成田市荒海貝塚—東部関東地方縄文文化終末期の研究—(予報)」『古代』36, 1-18頁  
—— 1975「千葉県成田市荒海貝塚(第二次調査)—東部関東における縄文後・晩期文化の研究(その二)—」『學術研究—地理学・歴史学・社会科学編—』24, 1-25頁, 早稲田大学教育学部  
芳賀英一 1998「再葬墓の構成土器」目黒吉明ほか『福島県指定史跡 鳥内遺跡』石川町教育委員会  
橋本澄夫 1982「能登邑知地溝帯とその周辺の文化—四つの雑感を中心に—」『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』92-104頁, 石川県立埋蔵文化財センター  
服部信博編 1992『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター  
林 謙作 1993「クニのない世界」『みちのく弥生文化』66-76頁, 大阪府立弥生文化博物館  
林 謙作・小田野哲憲編 1977『谷起島遺跡第一次発掘調査報告書(LOC. A)』一関市教育委員会  
弘前大学教育学部考古学研究室 1981「牧野Ⅱ遺跡出土遺物について(I)—岩木山麓の縄文時代終末期の土器資料—」『弘前大学考古学研究』1, 30-45頁  
平山久夫・安藤幸吉・中村五郎 1971「山内清男先生と語る」『北奥古代文化』3, 59-80頁  
福田正宏 1997「亀ヶ岡式土器における入組文のゆくえ」『物質文化』63, 36-57頁  
藤田弘道・矢島敬之ほか 1988『砂沢遺跡発掘調査報告書—図版編—』弘前市教育委員会  
—— 1991『砂沢遺跡発掘調査報告書—本文編—』弘前市教育委員会  
藤村東男 1980「大洞諸型式設定に関する二, 三の覚書」『考古風土記』5, 19-35頁  
藤村東男編 1988『九年橋遺跡第11次調査報告書』北上市教育委員会  
松田 訓・森 勇一・宮腰健司・佐藤公保 1990『月繩手・貴生町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター  
松本 茂編 1985「第1編 岩下A遺跡(第1次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅶ』福島県教育委員会・福島県文化センター  
松本建速 1998「大洞A'式土器を作った人々と砂沢式土器を作った人々」『野村崇先生還暦記念論集 北方の考古学』225-251頁  
松山 力・鈴木克彦・成田滋彦・城前喜英 1979「新郷村咽畑遺跡の調査—咽畑遺跡発掘調査報告書—」亀ヶ岡文化研究会  
馬目順一 1978「弥生土器—東北 南東北3—」『考古学ジャーナル』154, 12-19頁  
馬目順一・古川 猛 1970『福島県郡山市一人子遺跡の研究—所謂亀ヶ岡式土器終末期の吟味—』南奥考古学研究叢書Ⅰ  
目黒吉明 1962「福島県田村郡御代田遺跡について」『東北考古学』3, 30-43頁  
目黒吉明・柴田俊彰・芳賀英一・梅宮 茂ほか 1998『福島県指定史跡 鳥内遺跡』石川町教育委員会  
山下孫継・鍋倉勝夫 1974『鍛田遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会  
山内清男 1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』1-3, 139-157頁  
—— 1972「縄紋式土器—総論」『先史考古学論文集』新第四集, 145-183頁  
山内清男編 1964『日本原始美術』1, 講談社  
湯尻修平 1983「柴山出村式土器について」『北陸の考古学』(石川考古学研究会々誌26) 233-255頁  
吉岡康暢 1971「石川県下野遺跡の研究」『考古学雑誌』56-4, 1-49頁  
吉田富夫 1951「接触式土器の一新例」『考古学雑誌』37-4, 41頁  
吉田富夫・和田英雄 1971「名古屋市中区古沢町遺跡発掘調査報告書Ⅰ縄文時代編」名古屋市教育委員会  
渡辺一雄・大竹憲治 1983「道平遺跡の研究—福島県道平における縄文時代後・晩期埋設土器群の調査—」大熊町教育委員会
-

---

渡辺一雄・大竹憲治・大平好一ほか 1981『三貫地遺跡』福島県三貫地遺跡発掘調査団  
渡邊朋和 1998「三，緒立遺跡B地区出土土器(2)弥生土器」『黒埼町史 資料編一 原始・古代・中世』65-115頁，  
黒埼町

(国立歴史民俗博物館特別共同利用研究員)

(1999年5月7日 審査終了受理)

## The Formation Process of Yayoi Pottery in Tohoku District

TAKASE Katsunori

This paper deals with the chronology of pottery in Tohoku (the Northeast) district of Japan from the final stage of Jomon period to the beginning of the Yayoi period. First, the boundary of Ohora A' type pottery is determined, since this type is considered as the last of Jomon pottery in Tohoku district. Considering that the most important criterion of Ohora A' type is the triangular pattern called "Henkei-Koujimon", we should examine the developing process of this pattern. The writer of this paper has classified this pattern into three groups, and has pointed out the multiple occurrence of these groups in this district. In addition to that, just before Ohora A' type, we can find Ohora A<sub>2</sub> type, which features a kind of relief pattern. Ohora A<sub>2</sub> type at the same time provides the earliest bound of Ohora A' type. Ohora A' type can be seen throughout Tohoku district with some local variation of pottery shapes and patterns.

The latest bound of Ohora A' type is demarcated with the recognition of the first Yayoi pottery in various parts of Tohoku district. At this stage, we can recognize regional differences: the northern part developed Sunazawa type, the middle part developed Aokibata type, the southern part developed Miyota type. Consequently we see two stages; one is Ohora A' type stage and the other is Sunazawa/Aokibata/Miyota type stage. After a comparative study of wide ranging chronology of pottery in Japan, the former is considered to be positioned as the middle stage of the first style of Yayoi pottery in Kinai district (the center part of Japan), and the latter is considered as the new stage of the same style.